3 土　　器

遺物のなかで，最も多くをしめるのは土器であって，土壙・溝・井戸・整地土から大量に出土した。とくに土師器が多く，須恵器との割合は，およそ３：２である。ほかに，施釉陶器が約10個体分ある。ここでは編年的研究をすすめるうえで，良好な一括資料を，重点的にとりあ　**記載の方針**
＊ げる。鉛釉陶器，硯，墨書・墨画土器，箆書・刻画土器および埴輪については節をあらためる。

大別名称	略年代
平城宮Ⅰ	A.D. 710
平城宮Ⅱ	725
平城宮Ⅲ	750
平城宮Ⅳ	765
平城宮Ⅴ	780
平城宮Ⅵ	800
平城宮Ⅶ	825

Tab. 4　平城宮土器の大別

本報告では，平城宮の土器を７段階に大別し，平城宮Ⅰ～Ⅶと仮称する(Tab. 4)。これにかんしては，考察（pp. 139）を参照されたい。土器の成形・調整[1]の技法については，基本的には，従来の分類・用法[2]に準拠したが，補正したものもあるので，あらかじめかかげておきたい。土師器の杯・皿・椀など浅い器種は，成形後，底部内面・口縁部内外面に「よこなで」をくわえるのがつねである。しかし，「ヘラ磨き」・「ヘラ削り」の有無・範囲を検討すると，若干の種類を区別できる。まず底部外面を削ることなく，成形時の凹凸をそのままのこす（a手法），底部外面をヘラ削りして平らにする（b手法），底部から口　**a～c手法**
＊ 縁部上端まで外面の全面をヘラ削りする（c手法）を区別する[3]。このうち，a手法による大多数の土器の底部外面と，b手法による土器のうち，底部外面の削りが不徹底なものとには，木ノ葉[4]・指頭の圧痕がのこっている。つぎに視点をかえて，ヘラ磨きをまったくほどこさない（0手　**0～3手法**
法），口縁部外面をヘラ磨きする（1手法），底部外面をヘラ磨きする（2手法），口縁部・底部外面の全面をヘラ磨きする（3手法）を区別する[5]。こうして，a～c，0～3のそれぞれを組み合す
＊ ことによって，a_0・a_1・a_2・a_3，b_0・b_1・b_2・b_3，c_0・c_1・c_2・c_3の，計12の手法を区別しておく。

土師器の杯・皿・高杯には，暗文をもつものがある。２種類の暗文を組み合せてもちい，底　**暗　　文**
部内面に螺旋暗文，口縁部内面に斜放射暗文[6]をそれぞれほどこす実例が大多数をしめている。

1）従来，整形とよんだものを調整とよぶ。

2）『平城宮報告Ⅱ』pp. 63·91，PL.52，『平城宮報告Ⅳ』pp. 24。

3）a・b・cは別個の手法というよりもむしろ相関連した一連のものであって，a手法で作った土器の底部を削ったものがb手法，さらに削りが口縁部にまでおよんだものがc手法と理解している。a・b・cをまとめて木ノ葉手法の名称がある。田中琢「古代・中世における手工業の発達—畿内」(『日本の考古学』Ⅵ　歴史時代（上）1967年．pp. 191。

4）ここであつかう木ノ葉の圧痕は，縄文土器・弥生土器・古墳時代土師器の底にみられるものとはちがう。第１に，葉脈の細部が印されていない。これは用いた葉の種類の差によるものかも知れない。第２に凹凸のある不調整の底面をみると，その凹んだ部分においても葉脈の圧痕が消えておらず，他の部分と同じ状況で連続していることが多い。第３に，鉢の底部の１例では葉脈の圧痕は，平らな底部のみでなく，屈曲して立ちあがる口縁下端部まで 3cm ほど連続してのこっている。第２・第３の事実は平らな地面や台の上に木ノ葉を敷き，これに粘土をおしつけただけでは生じがたい。成形した土器を木ノ葉をつけたままの状況で手にとりあげて，調整をすすめた過程に生じたものであろう。

5）ここで全面というのは，範囲をしめすのであって，ヘラ磨きによって全面を覆っているという意味ではない。ヘラ磨きの線は，密接に重ねずに線と線とが広い間隔をおくことも多い。

6）斜線帯から成る暗文。正しい放射線の一部をなすものは正放射暗文とよぶ。

本文中で，たんに暗文と記述する場合は，この両種組み合せのものをさしている。須恵器の技法では，ロクロの回転を利用した「ロクロなで」と，回転運動と無関係な「なで」とを区別しておきたい。土器の器種の呼称を，従来のものとかえたものがある。各器種は，最初にあらわれる個所で説明し，改名した器種は，旧称と対比した。別表6をあわせて参照されたい。

土師器		個体数			比率%		
食器	杯A Ⅰ	42	101	409	9.6	23.1	93.4
	杯A Ⅱ	27			6.2		
	杯A Ⅲ	32			7.3		
	杯B Ⅰ身	1	15		3.4		
	杯B Ⅲ身	2					
	杯B 蓋	15					
	杯C Ⅰ	75			17.1		
	椀A Ⅰ	8	16		1.8	3.6	
	椀A Ⅱ	8			1.8		
	椀C	20			4.6		
	椀D	16			3.7		
	皿A Ⅰ	133	154		30.4	35.2	
	皿A Ⅱ	21			4.8		
	皿B 身	1	5		1.1		
	皿B 蓋	5					
	皿C	2			0.5		
	鉢B	4			0.9		
	高杯A	1			0.2		
貯蔵器	壺A 身	6	6	8	1.4	1.9	
	壺A 蓋	2					
	壺B	2			0.5		
煮炊具	甕A	14		20	3.2	4.5	
	甕B Ⅰ	3	4		0.9		
	甕B Ⅲ	1					
	甕C	1			0.2		
	甕X	1			0.2		
その他	大型蓋	1			0.2		
計		438			100.0		

杯B・皿B・壺Aは蓋と身とからなっているので，集計にあたっては，蓋・身の個体数を合計せず，いずれか，その多く出土しているものの方の数を採る。

	土師器	須恵器	計
食器	409 (70.0) (93.6)	175 (30.0) (92.6)	584 (93.3)
貯蔵器	8 (36.4) (1.8)	14 (63.6) (7.4)	22 (3.5)
煮炊具	20 (100.0) (4.6)	0	20 (3.2)
計	437 (69.8)	189 (30.2)	626 (100.0%)

Tab. 5 SK820出土土器の構成

須恵器		群別個体数 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	その他	個体数(比率%)	
食器	杯A Ⅰ1	8	3		1	71 (37.6)	175 (92.6)
	杯A Ⅰ2	9					
	杯A Ⅱ1	2					
	杯A Ⅱ2	1					
	杯A Ⅲ1	12	7		5		
	杯A Ⅲ2	7					
	杯A Ⅳ	13	2		1		
	杯B Ⅰ 身	18	6	2	3	32	
	杯B Ⅰ 蓋	14	2	3	5		
	杯B Ⅱ 身					2	
	杯B Ⅱ 蓋	2					
	杯B Ⅲ 身	7			4	15	66 (34.9)
	杯B Ⅲ 蓋	8	2	1	4		
	杯B Ⅳ 身	8			4	12	
	杯B Ⅳ 蓋	2			3		
	杯B Ⅴ 身	5				5	
	杯B Ⅴ 蓋	3					
	杯C	2				2(1.1)	
	杯E		3			3(1.6)	
	皿A	1				1(0.5)	
	皿B Ⅰ 身	8	1			14	20 (10.6)
	皿B Ⅰ 蓋	4	3	3			
	皿B Ⅱ 身					5	
	皿B Ⅱ 蓋		3	1	1		
	皿B Ⅲ 身				1	1	
	皿B Ⅲ 蓋						
	皿C Ⅰ	6				7(3.7)	
	皿C Ⅱ	1					
	椀A Ⅰ		1			3(1.6)	
	椀A Ⅱ		2				
	鉢A		1		1	2(1.1)	
貯蔵器	壺E	1				8(4.2)	14 (7.4)
	壺L				1		
	壺N				1		
	平瓶				1		
	水瓶				1		
	その他の壺				3		
	甕A				1	6(3.2)	
	甕B				2		
	甕C				2		
	甕X				1		
計					189		100.0

A　SK820 出土土器 (PL. 45～50・56～59・62, Fig. 35, Tab. 5・6)

東区西北隅（6AAB区U地区S48地点）の土壙 SK820 から，土師器 438個体以上（約70%），須恵器189個体以上（約30%）が出土した。保存良好で，「平城宮Ⅲ」の標準資料である。

i　土　師　器 (PL. 45・46・50, Tab. 5・6)

器種の構成

＊ SK820出土の土師器には，杯A，杯B，杯C，椀A，椀C，椀D，皿A，皿B，皿C，鉢B，杯B・皿Bの蓋，高杯A，壺A，壺A蓋，壺B，甕A～甕C，甕X，把手付有孔大型蓋の器種がある。これらのうち，大多数を占めるのは，杯・皿などの浅い器種である(Tab. 5)。これら浅い器種の大多数，および杯B・皿Bの蓋，壺Aなどの胎土は，砂粒をほとんどふくまない。色調は白みがかった淡褐色ないし灰白色のものが最も多く，灰褐色のものがこれにつぎ，赤褐色の
＊ ものも少数ある。概して前2者は硬く，後者は軟質である。これに対して，椀C，鉢，および甕類の胎土は砂粒を多く含み，灰～茶褐色のものが多い。

杯　A

H—a　杯A (PL. 45—1～3, 14～24・35・38・39)　広く平らな底部と，斜め上にひらく口縁部とからなる。101個体ある。口縁部には，A形態・B形態の2種類が区別できる。A形態の断面形は，口縁部下半が内彎，上半がわずかに外彎する弧をえがくものであって，口縁端部が内側
＊ にまるく肥厚することも特徴的である(1～3・14～17・20～24・38・39)。B形態の断面形は，全体が内彎する弧をえがき，口縁端部の肥厚が小さく目だたないものである（18・19)。A形態の口縁部をもつものが大多数を占める。杯Aは，大きさによって，杯AⅠ（1～3, PL. 59—23；口径19.8cm，高さ5.2cm[7]）・杯AⅡ（14～19・35；口径19.9cm，高さ4.0cm）・杯AⅢ（20～24・38・39, PL. 58—4；口径17.2cm，高さ3.4cm）にわけることができ，それぞれ42・27・32個体ある。この3者には，形
＊ 態・調整手法にも違いがあり，杯AⅠがすべてA形態の口縁部をもち，a_0手法によっているのに対して，杯AⅡ・杯AⅢには，A形態のほか，B形態の口縁部をもつものがあり，また杯AⅡには，a_0・a_1・b_0・b_1・b_3・c_1・c_3の7手法，杯AⅢには，a_0・a_1・a_2・b_0・b_1・b_3・c_0 の7手法がみとめられる（Tab. 6)。また，杯AⅠでは，暗文をもつものが2個体で，全体の5%にもたっしないのに対して，杯AⅡでは21個体（77%)，杯AⅢでは29個体（91%）に暗文がある。
＊ なお，螺旋文と斜放斜文とから成る通常の暗文に加えて，口縁端部内面に連弧文をほどこすものが，杯AⅡ・杯AⅢに1例ずつある。このほか注意をひくものとしては，底部に粘土紐の合せ目をとどめるもの，木葉圧痕・刷毛目状圧痕をあわせもつものがある。墨書土器は3例ある（PL. 58—4, 59—23）。これについては別にとりあげる。

杯　B

H—b　杯B（6・7）　平底と斜め上に開く口縁部とからなり，高台をそなえる。3個体ある。大きさと形態とによって，杯BⅠ（6；口径 23.2cm，高さ復原 6cm）と，杯BⅢ（7；口径17.0cm，高さ3.8cm）に区別する。杯BⅠは，口縁部が長く，深い形態をそなえ，c_1手法によっている。杯BⅢはB形態の口縁部をもち，b_1手法によっている。内面に斜放射暗文がある。

杯　C

H—c　杯C（36・37, PL. 58—3・8, 59—17・26）　小さな平底，あるいは丸底と斜め上にひらく口縁部とをそなえ，口縁部端面が内傾[8]することを特徴としている[9]。75個体ある。大きさによ

---

7)　測定可能なものの平均値。以下同様。

8)　口縁部端面・高台の脚の端面が，内側に高く外側に低いものを外傾，内側に低く外側に高いものを内傾とそれぞれよびわける。

って杯C Ⅰとする（口径17.8cm，高さ3.3cm）。$a_0 \cdot a_1 \cdot a_2 \cdot a_3 \cdot b_0 \cdot b_1 \cdot b_3$ 手法から成り，螺旋・斜方射暗文をもつものと，これをもたぬものとがある。墨書土器は5例ある。

椀 A *H*—d 椀A（8～11, PL. 59—25） 丸底に近い小さな平底と内彎する弧をえがいて，斜め上に大きく開く口縁部とからなり，底部から口縁部への移行は漸進的である。口縁部には，端部がまるくおわるもの（8・10・11）と，内傾するもの（9）とがある。16個体あり，大きさによって，椀A Ⅰ（8・9；口径18.7cm，高さ5.7cm）・椀A Ⅱ（10・11；口径16.8cm，高さ4.6cm）にわける。それぞれ8個体ずつある。前者においては，主として $a_0 \cdot c_3$ 手法をもちいているのに対して，

器種		手法	0	1	2	3	不明	合計
杯A	Ⅰ	a	42					42
	Ⅱ	a	8	2				10
		b	8	5		1		14
		c		1		1		2
		不明					1	1
	Ⅲ	a	9	5	1			15
		b	6	7		2	1	16
		c	1					1
杯B	Ⅰ	c		1				1
	Ⅲ	b		2				2
杯C	Ⅰ	a	60	4	1	1		66
		b	4	2		1	1	8
		不明					1	1

器種		手法	0	1	2	3	不明	合計
皿A	Ⅰ	a	86				21	107
		b	13		1		8	22
		c	1					1
		不明					3	3
	Ⅱ	a	9	1			3	13
		b	4			1		5
		不明					3	3
椀A	Ⅰ	a	3			1		4
		c	1			3		4
	Ⅱ	a				1		1
		c	4			1		5
		不明					2	2

	0	1	2	3	不明	
a	217(84.1) (83.8)	12(4.7) (40.0)	2(0.8) (66.7)	3(1.2) (23.1)	24(9.3) (70.6)	258 (76.1)
b	35(52.2) (13.5)	16(23.9) (53.3)	1(1.5) (33.3)	5(7.5) (38.5)	10(14.9) (29.4)	67 (19.8)
c	7(50.0) (2.7)	2(14.3) (6.7)	0	5(35.7) (38.5)	0	14 (4.1)
	259 (76.4)	30 (8.8)	3 (0.9)	13 (3.8)	34 (10.0)	339 (100%)

Tab. 6 SK820出土土師器の手法

後者は大多数がすべて c_0 手法によっている。なお，口縁部外面のヘラ磨きは，4回にわけて，器面を4角形にめぐるものであって，底部外面のヘラ磨きは1方向をとっている。また，ヘラ削りの方向は，口縁部にほぼ平行している。墨書土器は椀A Ⅰに1例（PL. 59—25）ある。

椀 C *H*—e 椀C（40・41, PL. 58—7） 丸底に近い平底と内彎する弧をえがいて立つ口縁部とからなる（口径13.2cm，高さ4.0cm）。20個体ある。内傾する口縁部端面をもつものが多い。e手法[10]によっており，口縁部上端の外面を幅せまくよこなでし，その下は底部外面にいたるま

9) 従来の皿A Ⅱ・Ⅲのうち，口縁部端面内傾のもの（『平城宮報告Ⅱ』PL. 45—214，『平城宮報告Ⅵ』PL. 55—19）を杯Cと改称。

10) 内面全面と口縁部上端近くの外面のせまい範囲とを強くヨコナデし，以下を不調整のままにしながら底部外面に木ノ葉圧痕をとどめないものである（『平城宮報告Ⅳ』p. 25）。今回の分類では a_0 に属するが，e手法の名を使う。

で，不調整のままのこしている。底部外面に，粘土紐の接ぎ目をとどめるものがあり，また，よこなでにもちいたとみられる布の圧痕をとどめるものもある。「人事」と記した墨書土器が1例（PL. 58—7）ある。

H—f　椀D（12・13）　椀Aをやや浅くした形態である（口径17.8cm，高さ4.0cm）。16個体 椀 D
* ある。口縁端部がまるくおわるもの（13）が大多数を占めており，内傾する端面をもつもの（12）は1例にすぎない。椀Cと同様，e手法を特徴とし，これには，幅せまいよこなでの下を不調整のままのこすもの，ヘラ削りするもの，ヘラ削りの後ヘラ磨きを加えるもの，の3種類があり，ヘラ削りするものが最も多い。

H—g　皿A（31～34，PL. 57—1・2，58—5，59—13・21・24・28）　広い平らな底部と斜め上 皿 A
* にひらく短い口縁部とをそなえる。154個体ある。口縁部には，さきに杯Aにみたと同様，A形態（32）・B形態（34）の2種類がある。大きさによって，皿AⅠ（31～34，PL. 57—1・2，58—5，59—21・24・28；口径22.5cm，高さ3.0cm）・皿AⅡ（PL.59—13；口径18.3cm，高さ2.8cm）にわける。皿AⅠは133個体ある。口縁部にはA・B両形態がある。調整手法には，a_0・b_0・b_2・c_0の4手法がみとめられ，このうちa_0手法が大多数を占めており，c_0手法は1例のみで
* ある。手法の種類は口縁部の形態と関連をもたない。しかし，暗文の有無は口縁部の形態と無縁ではなく，もっぱらA形態の口縁部をもつ皿にみられる。皿AⅡは21個体ある。このうち，A形態の口縁部をもつものは15例あり，いずれもB形態をもつものに比較して法量が小さい。a_0・a_1・b_0・b_3の4手法がみられ，判定可能な11個体すべてに暗文がある。いっぽうB形態の口縁部をもつものは，いずれもa_0手法によっており，暗文をもつ。墨書土器は皿AⅠに7例
* （PL. 57—1・2，58—5・6，59—21・24・28），皿AⅡに5例（PL. 59—13）ある。

H—h　皿B（30）　皿Aに高台を付けた器種である。蓋と1組になる。1個体あり，大き 皿 B
さによって，皿BⅠ（30；口径30.9cm，高さ2.9cm）とよぶ。A形態の口縁部をもち，b_0手法によっており，螺旋・斜放射暗文がある。

H—i　皿C（42・43；口径11.1cm，高さ2.5cm）小さな皿である。暗文はいっさいない。 皿 C

* *H*—j　蓋（25～29）　平らな頂部と，なだらかに彎曲する縁部からなる。頂部外面のヘラ 蓋
磨きは，まず相対する2辺に，平行直線を密に重ねたのち，他の2辺におよぶものであって，つまみを中心として，方形を形成している。縁部外面には，これと別に，縁部の円周にそってヘラ磨きを加えている。なお，つまみ上面・頂部内面にも螺旋暗文をほどこすものがある。大きさからみて，皿BⅠ蓋（29）・杯BⅠ蓋（28）と想定できるものがある。しかし，他の器種と組み
* 合う可能性もある。

H—k　鉢B（4・5，PL. 59—11）　丸底に近い平底と内彎しながらひらく口縁部とをもち， 鉢 B
半球状を呈する[11]（口径19.1cm，高さ7.9cm）。4個体ある。口縁端部を内側に，わずかに肥厚させたものが多い。砂粒を多量にふくんでいる。a_0手法によっており，木葉の圧痕をとどめるものが1例ある。また，外面の広範囲に煤が付着しているものが過半数を占めており，それが一
* 部，内面におよんでいるものもある。「信等」と記した墨書土器が1例ある（PL. 59—11）。

11）この器種は今回新出である。『平城宮報告Ⅳ』で鉢Bとよんだもの（同p. 26，PL. 38—44）は鉢Aとし，『平城宮報告Ⅵ』で報告したSD485出土の土師器で鉢B（付表では椀B）とよんだものは，鉢Cとよびかえる。なお，旧鉢A（『平城宮報告Ⅱ』PL. 45—238）は鉢Eとする。

高杯 A　*H*—1　高杯A　多角形に面取りした脚部の上に，水平にひらく杯部をのせる高杯である。杯部の破片が1例あるのみである。内面の口縁部上端には斜放射暗文がある。外面には，線状のヘラ磨きがみとめられる。

壺 A　*H*—m　壺A（45）　やや扁平な器体と，短く立ち上る広い口頸部とからなり，相対する2方の肩に把手をつける，いわゆる薬壺[12]とよばれる土器である。全体がわかる実例は小型品（45；口径8.8cm，高さ7.4cm）である。なおこのほかに，やはり小型品の口縁部破片1，大型品の把手破片1，底部破片3がある。 *

壺 A 蓋　*H*—n　壺A蓋（44）　水平な頂部から屈曲してたれさがる縁部をもつ小型の蓋（口径 11.2 cm）である。頂部外面には，杯・皿の蓋と同様，方形のヘラ磨きをほどこしており，内面には，螺旋暗文がある。 *

壺 B　*H*—o　壺B（46・47）　扁平な器体に短く外反する口縁部をつけた，広口の土器[13]である。

甕 A　*H*—p　甕A（PL. 46—51～54・56）　球形に近い器体と，強く外反する口縁部とからなる広口の土器である。大きさによって，甕AⅠ（51；口径36cm，高さ31cm）・甕AⅡ（56；口径26cm，高さ26cm）・甕AⅢ（54；口径20cm，高さ19cm）・甕AⅣ（53；口径17cm，高さ16cm）・甕AⅤ（52；口径15cm，高さ13cm）にわける。体部外面をハケメで調整する，体部内面はなでて調整するものが大多数であり，ハケメをつけるものはきわめて少ない。 *

甕 B　*H*—q　甕B（49・50・55）　甕Aとほぼ同じ形態をもち，相対する2方の肩に把手をつけたものである。把手は，平面2等辺三角形（底辺：高さ≒2：1）の扁平なもので，上方におりまげている。大きさによって，甕BⅠ（49・50；口径26cm，高さ25cm）と甕BⅢ（55；口径20cm，高さ15cm）とにわける。 *

甕 C　*H*—r　甕C（PL. 50—57）　頸部でややしまる，長手丸底の器体に，斜め上にひらく口縁部をつける。口縁部の内外をよこなでし，体部の内外面は，ともに底部側から口縁部側にむかってハケメをつけており，外面の下半は，これと逆方向にヘラ削りしている。底部は火熱によって赤変しており，上半には煤が付着している。

甕 X　*H*—s　甕X（PL. 50—58）　わずかに上にひろがる筒状の器体に，斜め上にひらく口縁部をつけたものである。口縁部の内外をよこなでしており，体部外面には，あらいハケメをつけ，底部付近はヘラ削りしている。内面の調整は不十分であって，左回りに螺旋状に積みあげた粘土紐の合わせ目がのこっている。胎土は砂粒をふくむ黄白色である。用途は不明だが仮りに甕としてあつかっておく（口径8.0cm，高さ復原 34.0cm）。1個体ある。 *

把手付双孔大型蓋　*H*—t　把手付双孔大型蓋（PL. 46—48）　深い笠形の大型土器である（口径48.0cm，高さ18.5 cm）。頂部に半環状の把手をつけ，把手の主軸に直交する2方向の，頂部中央からやや下ったところに，円孔（径5cm）をあける。頂部の外面と内面上半とをハケメで仕上げ，内面下半をヨコナデしている。この蓋を何にかぶせたかは確められない。火炉の蓋とするのも1案である。 *

12）『平城宮報告Ⅱ』で壺Aとした鉄鉢形の土器（同 P. 66，PL. 45—237）は鉢Aと改称し，『平城宮報告Ⅵ』で壺Aとよんだもの（同 P. 56，PL. 67—339）は，鉢Dと改称する。

13）『平城宮報告Ⅳ』で鉢Cとよんだもの（PL. 38—33）および，『平城宮報告Ⅵ』で小型壺・鉢Cとよんだもの（PL. 57—77，PL. 67—334）を壺Bと改称し，従来壺Bとよんだもの（『平城宮報告Ⅱ』PL. 51—308）を壺Eと改称する。なお，新旧器種名の対比は別表6を参照。

ii　須　恵　器（PL. 47～50, Fig. 35, Tab. 5）

SK820出土の須恵器には，杯A，杯B，杯B蓋，杯C，杯E，椀A，皿A，皿B，皿B蓋，皿C，鉢A，壺A蓋，壺E，壺L，壺N，平瓶，水瓶，甕A，甕B，甕C，甕Xがある。

食　器　類　上に列挙した器種のうち，食器類，すなわち杯・杯B蓋，皿・皿B蓋など，供
＊ 膳用の浅い形態の器種は，数が多く，色調・質・技法・形態によって，識別可能な3つの群に属するものが多い。そこで，これら3群を，第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群とよびわけ，この順に記述したのち，3群以外の食器類および，深い形態の器種をとりあげる。

須恵器第Ⅰ群土器

須恵器第Ⅰ群土器は，青灰色を呈する硬い質のものが多数を占める。ほかには，焼成不良で灰白色の，やや軟質のものを若干みるにすぎない。焼成の際に，ワラをはさんで土器を重ねた
＊ ことによって，数mm幅の線状に黒ずんだ，いわゆる火襷（ひだすき）をもつものがある。胎土中に黒色物質の小粒（最大長3 mm）をふくむものが少数ある。

第Ⅰ群土器は，3群のうち，数量的に最も多くの土器を包括しており，杯A，杯B，杯B蓋，杯C，皿A，皿B，皿B蓋，皿Cなどの器種がみとめられる。これらの土器は，右回りのロクロを用いて作ったものが大多数を占める[14]。以下，器種ごとに記述をすすめる。

杯　A

＊ *S*Ⅰ—a　杯A（PL. 47—201～220, PL. 59—16・27）　平担な底部と斜上にまっすぐのびる口縁部とからなる。底部外面には，ヘラ切り痕，すなわち，ロクロからヘラで切り離した痕跡をとどめている。後にこれを手でなでつけたものが多いが，不徹底におわっている。主として口径によって，杯AⅠ～AⅣにわけるが，このうち，杯AⅠ～AⅢは，さらに器高によってそれぞれ2分できるので，杯AⅠ-1・杯AⅠ-2などとよびわけておく。こうして全体を，杯AⅠ-1（201・
＊ 202；口径19.5cm，高さ5.3cm）・杯AⅠ-2（203～205；口径19.1cm，高さ3.9cm）・杯AⅡ-1（206, 207；口径17.2cm，高さ4.7cm）・杯AⅡ-2（口径17.0cm，高さ3.4cm）・杯AⅢ-1（208～211；口径15.8cm，高さ4.3cm）・杯AⅢ-2（212～215；口径14.1cm，高さ3.6cm）・杯AⅣ(216～220；口径11.5 cm，高さ3.4cm）にわける。

土器の口径と高さとの割合をしめすために，高さ/口径×100を「径高指数」とよび，杯Aの
＊ 細別器種の数値を比較すると，杯AⅠ-1・杯AⅡ-1・杯AⅢ-1ではいずれも27前後，また，杯AⅠ-2・杯AⅡ-2は20前後をしめし，口径と高さとの比率をほぼ等しくたもったまま，大小の関係をもっている。いっぽう，杯AⅡ-2・杯AⅢ-2・杯AⅣの器高は，いずれも大差がない。これらは，もっぱら口径の大小関係にある。墨書土器は杯AⅢに2例（PL. 59—16・27）ある。

杯　B

*S*Ⅰ—b　杯B（PL. 48—279～289）　杯Aに高台をつけた形態をそなえ，蓋と1組になる。
＊ 高台は，外に力強く張り，断面形が角張っている。脚端面には，内傾（280），水平，外傾（281）の3種類がある。また，脚端面には，平担なもののほかに，凹面をなすものも多い。底部下面は，ロクロで削ったものと削っていないものとがあり[15]，後者には，ヘラ切り痕をとど

14）須恵器第Ⅰ群土器114個（杯A44・杯B24・杯B蓋29・皿B 5・皿B蓋4・皿A 1・皿C 7）のロクロ回転方向は，右回り63個（90%），左回り7個（10%），不明44個。これは主にヘラキリ痕と削り調整にかんして観察した結果である。第Ⅰ群土器では成形段階における回転方向の判定がむずかしいが，判明した少数例では，ヘラキリ痕のしめす回転方向と一致している。

15）以下，須恵器の記述でとくにことわらずに削るという場合は，ロクロ上で回転しながら削ったものを指す。回転と無関係にヘラで削った場合は，ヘラで削ったと表現する。

めている。ロクロ削りの範囲が底部下面にとどまらず，口縁部下端におよぶものもある。削りの後，回転を利用せずになでて仕上げるのをつねとする。大きさによって杯BⅠ（279～281；口径19.9cm，高さ6.0cm）・杯BⅡ[16]（口径約18cm）・杯BⅢ（282～285；口径15.1cm，高さ4.4cm）・杯BⅣ（286・287；口径11.7cm，高さ4.0cm）・杯BⅤ（288・289；口径10.0cm，高さ3.9cm）の5つに分ける。杯BⅠ・杯BⅢの径高指数は，ともに30前後でほぼ等しく，杯BⅣ・杯BⅤは，器高に大差なく，口径のみが異る。 *

杯 B 蓋 *S*Ⅰ—c　杯B蓋（265～278，PL. 58—10，59—22）　杯Bの蓋は，平らな頂部および屈曲する縁部とから成るA形態のもの（265）と，頂部がまるく笠形を呈し，縁部が屈曲しないB形態のもの（277）が区別できる[17]。第Ⅰ群の杯蓋はA形態が大多数を占め，B形態は，杯BⅣ・杯BⅤ

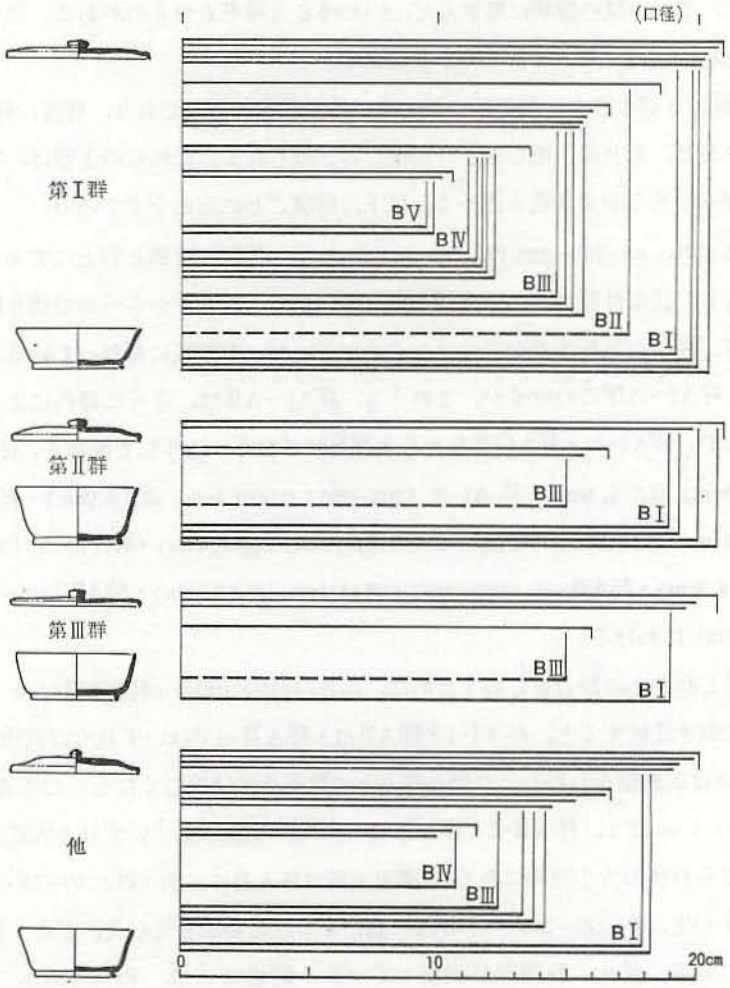

Fig. 35　須恵器杯Bの蓋・身の対応

などの小型の杯蓋に少数みるにすぎない。A形態の屈曲する縁部は下方にするどく突出している。つまみは扁平であって，その上面の中央はわずかに突出しており，周辺がややくぼむものがある。頂部外面は，削った後になでるものが多数を占め，ほかに，削ったままのもの，削らずにヘラ切り痕をなでて消したものが，それぞれ少数ある。内面の中央には，仕上げのナデが *

16）杯BⅡは，今回の資料には見られないが，後述するようにこれに対応する蓋があり，その蓋には重ね焼きによる身の痕跡があるので，存在したことは明らかである（Fig. 35）。

17）さきにこのそれぞれを蓋A・蓋Bとよんだ（『平城宮報告Ⅱ』p. 67）。

みとめられる。第Ⅰ群土器の杯B蓋を，大きさによって，杯BⅠ蓋（265～272，PL. 59—9・22；径20.9cm）・杯BⅡ蓋（273；径18.4cm）・杯BⅢ蓋（274～276，PL. 58—10；径16.1cm）・杯BⅣ蓋（277；径12.9cm）・杯BⅤ蓋（278；径10.9cm）にわける。これらはそれぞれ杯BⅠ～Ⅴに対応する（Fig. 35）。なお，杯BⅠ～Ⅲ・Ⅴ蓋には，それぞれの身と重ね合せて焼成した際の痕跡をとど
＊ めたものがあり，身の口径がわかるものが計12例ある。墨書土器が杯BⅠ蓋に3例（PL. 59—9・22），杯BⅢ蓋に1例（PL. 58—10）ある。

*S*Ⅰ—d　杯C（PL. 47—227・228）　端が巻きこんでおわる口縁部，すなわち土師器杯AのA形態の口縁部をそなえる杯である。底部外面はいずれもへらで切ったままである。　杯　C

*S*Ⅰ—e　皿A（221）　皿は，扁平な底部に短い口縁部をそなえた器種である。皿Aは，皿の
＊ なかでは深い形態をもち，杯Aと同様の口縁端部をそなえている。　皿　A

*S*Ⅰ—f　皿B（PL. 48—293～295）　皿Bは，皿Aに高台をつけた形態をそなえ，蓋と1組になる。高台の断面形は角張っており，脚端の形状には，杯Bであげた3種類がいずれも存在する。底部外面は，すべて削って仕上げている。外面周縁は，いずれも高台を付ける際になでている。大きさによって，皿BⅠとよぶ。墨書土器が1例ある（PL. 62—42）。　皿　B

＊ *S*Ⅰ—g　皿B蓋（290～292）　杯B蓋と同様，A形態，すなわち屈曲する縁部をもつ扁平な蓋である。つまみが扁平で，その上面中央をわずかに高めている点も，杯B蓋に共通する。頂部を縁部近くまで削り，なでて仕上げている。内面中央には，仕上げナデがみとめられる。　皿　B　蓋

*S*Ⅰ—h　皿C（PL. 47—222～226）　浅い皿である。口縁端部がやや角張っており，わずかに外方，または内方に突出するものが多い。底部外面の中央にヘラキリ痕をとどめるが，周縁
＊ はなでつけているものが多い。径の大小によって，皿CⅠ（222～224・226；口径20.8cm，高さ2.2cm）・皿CⅡ（225；口径15.7cm，高さ1.9cm）にわける。　皿　C

須恵器第Ⅱ群土器は，青～淡灰色を呈し，硬質か，やや軟質である。胎土に黒色物質の粒子（最大長5mm）をふくむものが大多数を占める。第Ⅰ群土器にくらべて器表は，平滑だが，削った部分では，黒色物質の粒子が移動してくずれ，墨でぼかしたような状況を呈する。火襷（ひだすき）を
＊ とどめるものも多い。杯A，杯B，杯B蓋，杯E，椀A，皿B，皿B蓋があり，ロクロを右に回して成形・調整したものが多いが，左回りのものが占める割合は，第Ⅰ群土器におけるよりも多い。また，成形時・調整時でロクロの回転方向が異るものもふくまれている。[18]　須恵器第Ⅱ群土器

*S*Ⅱ—a　杯A（PL. 47—229・230・233・235）　第Ⅰ群土器の杯Aと比較して器高がやや高い。口縁部と底部とを明瞭な稜線によって区別しており，底部外面とそれに続く口縁下端部と
＊ を削っている。口径と高さとによって，杯AⅠ（229・230；口径19.6cm，高さ6.1cm）・杯AⅢ（233；口径14.2cm，高さ5.3cm）・杯AⅣ（235；口径11.1cm，高さ4.0cm）にわける。それぞれの個体数は3・7・2個である。口縁部内面下半にカキメ（調整ロクロの回転を利用したハケメ用工具による痕）をとどめるものがある（230）。墨書土器は杯AⅢに1例（墨書土器38）ある。　杯　A

*S*Ⅱ—b　杯B（PL. 48—296～300）　形態は第Ⅰ群土器の杯Bと大差ないが，器高がやや高　杯　B

18）第Ⅱ群土器の27個体（杯A 7個・杯B 4個・杯B蓋4個・杯E3個・椀A3個・皿B蓋6個）にかんして検討したところ，成形段階（ナデ）・調整段階ともに右まわりのもの17個，ともに左回りのもの5個，成形段階右回り，調整段階左回りのもの5個となっている。成形段階について右回り・左回りを比較すると22個（81%）対5個（19%）になる。

い。ただし口縁部端面は，内傾，すなわち内側に下る斜面をなすものと，ほぼ水平なものの2種類であって，明瞭な外傾，すなわち，外側に下る斜面をなすものはない。底部下面から口縁の下端部ないし下半部までを削っている。削ったのちにナデを加えていない点も，第Ⅰ群土器と異なっている。現存するのは杯BI（口径19.8cm，高さ6.5cm）のみである。しかし対応する蓋（301・302）から，杯BⅢ（口径約15cm）の存在を想定できる。 *

杯 B 蓋 *S*Ⅱ—c 杯B蓋（301～304） B形態，すなわち縁部が屈曲しない蓋である。つまみの形状は，第Ⅰ群土器の杯B蓋のそれと大差ない。縁部の端近くまでを削り，その上にナデを加えていないものもある。このほか内面中央をなでたものがある。杯BI蓋（303・304；口径20.4cm）・杯BⅢ蓋（301・302；口径16.3cm）にわける。

杯 E *S*Ⅱ—d 杯E（PL. 47—231・232） 内彎する弧をえがきながら，口縁部がわずかに斜め上にひらく形態をもち，口縁端面が内傾することを特徴とする。器面はひじように平滑であって，底部外面から口縁下端部にいたるまでていねいに削り，しかも，底部から口縁部への移行部分をまるく仕上げている。3個体ある（口径16.6cm，高さ5.1cm）。 *

皿 B *S*Ⅱ—e 皿B（PL. 48—308） 高台をふくむ破片が1個体分ある。底部外面を削り，底部外面外周と口縁部をなでている。大きさから皿BIとよぶ（口径復原27cm，高さ復原5cm）。 *

皿 B 蓋 *S*Ⅱ—f 皿B蓋（305～307） B形態の蓋であって，扁平なつまみの上面中央がわずかに突出する点も，杯B蓋と共通する。頂部を縁部近くまで削る。縁部の上面にカキメ（幅1cm内外）をとどめるもの，内面のみをヘラ磨きするもの（307）がそれぞれ1例ずつある。大きさから皿BI蓋（307，口径30.2cm）と皿BⅡ蓋（305・306；口径24.1cm）とにわける。

椀 A *S*Ⅱ—g 椀A（PL. 47—234・236・237） 杯Aをさらに深い形態にしたものである。底部外面とそれに続く口縁下端部を削っているのは，杯Aと同様である。大きさによって椀AI（234；口径13.9cm，高さ6.1cm）・椀AⅡ（236・237；口径10.8cm，高さ4.8cm）にわける。 *

須恵器第Ⅲ群土器 須恵器第Ⅲ群土器は灰白色を呈し，磁器に近い感じをあたえる，きわめて硬質の土器である。不透明の白い石をふくんでいる。第Ⅱ群土器と同様，黒色物質をふくむものが少数あるが，調整によるくずれはみられない。火襷（ひだすき）はまったくみられず，また，高温で焼成したとみられるにもかかわらず，吹き出し釉や自然釉はまったくみとめられない。杯B，杯B蓋，皿B蓋がある。ロクロの回転方向がわかるものでは，成形・調整ともに右回りのみである。[19] *

杯 B I *S*Ⅲ—a 杯BI（PL. 48—314・315） 第Ⅰ・Ⅱ群土器の杯と比較して，高さが大きく，口径が小さい（口径18.8cm，高さ7.1cm）。そして，口縁部の外傾度がすくない。内外の器面には，ロクロ調整による起伏がほとんどみられず，土器全体がまるみをおびている。高台はまっすぐ下方にのびる小さなものであって，第Ⅰ・Ⅱ群土器杯Bの，外に張る高台とは形状をまったく異にする。蓋にも共通する手法として注意をひくのは，内面に同心円文当板による圧痕をとどめるもののあることである。。墨書土器は杯BIに1例ある（墨書土器36）。 *

杯 B 蓋 *S*Ⅲ—b 杯B蓋（311～313） B形態の蓋である。扁平なもの，なか高のもの（312）がともにあり，いずれも全体をまるく仕上げており，器面に起伏がすくない点で，杯Bと共通する。 *

つまみは，断面が逆台形を呈することが特徴的である。内面に当板の同心円文をとどめるも

19) 第Ⅲ群土器の10個体（杯B 2個・杯B蓋4個・皿B蓋4個）について検討した結果，成形・調整ともに右回りのもの9個，左回りのもの0，不明1個である。

のが多い。他に，内面のほぼ全体をなでて仕上げたものがある。杯BI蓋（311～313；口径20.0cm）と杯BIII蓋（口径15.9cm）とがある。

SIII—c　皿B蓋（309・310）　B形態の蓋である。つまみの形状が，断面逆台形を呈すること，内面に同心円文をもつもののあることなど，杯Bの蓋と共通する。縁部上面にカキメをの
＊こすものがある。内外面とも縁部・頂部とにわけてヘラ磨きしている特殊例がある。皿BIの蓋（309；口径29.8cm）と，皿BII蓋かとみられるもの（310；口径27.0cm）とがある。

つぎに第I～III群以外の須恵器[20]の食器類についてのべる。これには，杯A，杯B，杯B蓋，皿B，皿B蓋，皿Cがある。　**第I～III群以外の食器**

S X—a　杯A（PL. 47—238～244）　杯AI（238），杯AIII（239～241・243・244），杯AIV（242）が　**杯　A**
＊ある。このうち若干例（240～242）は第I群土器にぞくするかも知れない。色と質からは灰白色で黒色物質をふくまないもの（238・239・240，ただし238の内面は黒い），灰色でとくに硬質のもの（244），灰色で砂粒を多量にふくむもの（241），青灰色で黒色物質をふくまないもの（242・243）が区別できる。また，手法の上からは，全面をロクロでていねいになでる（244），なでるのみで削らない（240），底部は一方向になでて仕上げ，口縁下端部を削る（243），底部のみをまる
＊く削る（241），底部を削り，その外端から口縁下端部までをまるく削る（238・239・242）などが区別される。なお，火襷をもつもの（239）がある。

S X—b　杯B（256～263）　杯BI（260～262），杯BIII（256～258・263），杯BIV（259）がある。このうち，257・258は手法上，第I群土器に一致するが，規格からはずれるため，いちおう区別したものである。260・263は，径高指数がほぼ等しく，質も共通し，一群にぞくする。　**杯　B**
＊また259は，灰白色で表面は粗面をなしており，岡山県寒風古窯の製品に似ている。

260には一部に緑色の吹出釉がみられる。底部外面の調整方法には，ヘラで切ったままのもの（262），切ったあとをなでるもの（258），あらく削るもの（260），削ったあとをなでるもの（257）などがある。なお，262は，ひじょうに深い形態をもつが，便宜的に杯BIとしてあつかっておく。焼成悪く，内面は灰白色，外面は煤けて黒くなっている。

＊S X—c　杯B蓋（245～250，252～255）　大きさによって杯BI蓋（252～255），杯BIII蓋（248～250），杯BIV蓋（245～247）にわける。頂部が笠形をなすものが多いが，扁平なもの（247）もある。青灰色で硬質のものがほとんどである。しかし249・255は，灰白色できわめて硬質であって，手法も一致しており，未知の一群にぞくする可能性が大きい。　**杯　B　蓋**

S X—d　皿BIII（264）　第I群土器の皿BIと径高指数を等しくする。第I群土器にぞくする　**皿　B**
＊かも知れない。底は切り離しのままである。

S X—e　皿B蓋（251）　外面一面には薄い黄緑色の自然釉が吹きでており，内面は灰色である。外面の頂部から縁部にかけての約2/3の範囲を削っている。内面に重ね焼きの痕跡がありこれによって，対応する皿Bの口径が25.5cm内外であったことがわかる。　**皿　B　蓋**

なお，所属の群が明確でない墨書土器としては，杯AIに3例（PL. 59—15），杯AIIIに1例，
＊杯AIVに1例（PL. 59—32），細別不明の杯に1例（PL. 59—20），杯BIVに1例（PL. 59—19），杯B蓋に1例（PL. 59—18），皿CIに1例ある。

20）将来，帰属が判明する可能性があるものと，明らかにこの3つの土器群以外にぞくするものをともにふくみ，また平城宮IかIIの可能性をもつもの（249・258）若干をもふくんでいる。

貯蔵器類ほか　浅い形態の器種につづいてそれ以外の，深い形態の器種についてのべる。

鉢　A　*S*—a　鉢A（PL. 49—316・317）　内彎して立つ口縁部とまるみをおびた尖底から成る器種[21]で2個ある。口縁端部は，体部からしだいに薄くまるく作る。口縁部の内外面をロクロでなでたあと，器体下半の外面をていねいに削っている。316は，灰白色軟質で胎土に黒色物質をふくみ明らかに第Ⅱ群土器にぞくしている。　*

壺　A　蓋　*S*—b　壺A蓋（323～325）　壺A[22]，すなわち薬壺は出土していないが，蓋が3つある。頂部から垂直におれる縁部をもつものと，縁部がややまるくおれまがるものとがある。縁端部の形状は3個とも異っており，縁端を内外から尖して内外両側に段をもつもの（325），縁部内端を下方に突出させて外側に段を作るもの（323），内方に上る斜面をなすもの（324）がある。

壺　E　*S*—c　壺E（329）　広口短頸の小型壺である[23]。短く外にふんばる高台をつける（口径9.8 cm，高さ6cm）。肩幅（13.6cm）は器高のほぼ2倍に相当する。　*

壺　L　*S*—d　壺L（318）　球形に近い器体に長い口頸部をのせた高台付の壺である[24]。器体の小破片にすぎないが，上半には沈線文を2条めぐらしている。灰褐色硬質で，上半に自然釉がかかる。猿投山古窯の製品であろう。

壺　N　*S*—e　壺N（321）　丈高の器体に短く外反する細い口頸部をのせ，両肩に耳をつける。　*

その他の壺　その他の壺（320・328・330）には，肩がまるいやや扁平な器体をもつ壺（320）がある。頸部は器体からロクロで一気に引きあげている。他に底をふくむ壺の器体下部の破片が2例ある（328・330）。うち1例（330）は高台の基部に突線をめぐらしている。器体下部を削っている。

水　瓶　*S*—f　水瓶（すいびょう）（319）　卵形の器体に細長い口頸部をのせたもので，一部をとどめるのみである。2条の沈線をめぐらす。体部から頸部にかけては3段で構成している。器体下部を削っている。細砂を含むひじように硬質の土器で，肩に自然釉がかかる。猿投山古窯の製品であろう。　*

平　瓶　*S*—g　平瓶（322）　小型品（肩の径6.8cm，現存の器高2cm）の破片である。平担な上面と体部側面との間に稜をもつ。小型ながらロクロで挽き，円板をはりつけて体部の上面を仕あげる。

甕　A　*S*—h　甕A（PL. 50—334）　肩がまるく張った長手の器体と，大きく広くひらく口頸部とをそなえた丸底の器種である。外面に平行線叩き目，内面に当板の同心円文をとどめることは通常どおりであるが，器体の上半と下半で異った当板を用いている。　*

甕　B　*S*—i　甕B（PL. 49—326・327，PL. 50—332）　甕Aと同形態の器体をもち，口縁部が斜上にまっすぐのびる土器である。完形の実例（332；口径28.9cm，高さ32.1cm）は体部の相対する2方に把手をつけている。他に，口縁部の破片が二つある。

甕　C　*S*—j　甕C（PL. 49—331，PL. 50—333）　やや肩の張った広口短頸の土器である。肩幅は器高をしのいでおり，高台のつくもの(333)と，つかないもの(331)とがある。外面に平行線叩目文，内面に当板同心円文をとどめる。　*

甕　X　*S*—k　甕X（PL. 50—335）　土師器甕Aを模した小型の器で，丸い体部と外反する口縁部からなり，口縁端部内側がわずかに突出する。底部外面の下半をヘラで削って仕上げている。

21）従来，壺Aとしてきたものを『平城宮報告Ⅵ』（PL. 61—209～214）以来，鉢Aと改称している。また『平城宮報告Ⅳ・Ⅵ』で鉢Bとしたものを，今回から鉢Aにふくめる。

22）従来，壺Cとしてきたものを『平城宮報告Ⅵ』（PL. 60—196）以来，壺Aと改称した。

23）従来，壺Bとよんだもの（『平城宮報告Ⅱ』PL. 49—64）を壺Eとし，旧壺E（『平城宮報告Ⅳ』PL. 39—213・214）を壺Mと改める。

24）従来，瓶とよんだもの（『平城宮報告Ⅱ』（PL.47—29）を壺Lとよぶ。

なお新旧器種名の対比は別表6を参照。

B　SK2101 出土土器　(PL. 60—47～50, Fig. 36・37)

中区東半部の南端近く（6AAO区G地区 H34 地点）にある，土壙SK2101からは，土師器162個体・須恵器 126 個体以上が出土している。土師器のうち，土壙の底近くで出土したものは比較的保存状態がよいが，それ以外は保存が良好ではなく，細部の観察に充分たえるものではな
＊ い。この土壙の土器は「平城宮Ⅲ」にぞくしている。しかし，SK820 出土土器と比較して，やや新しい性質をもっていることは後論するとおりである。なお，この土壙に接近する SK 2102は，層位的に SK2101より古いことが判明しており，その土器は「平城宮Ⅱ」にぞくするものとして後に紹介する。

土　師　器　土師器には，杯AⅡ(Fig. 36—69)，杯AⅢ（63・64），杯BⅡ（67・68），杯BⅢ，　土 師 器
＊ 杯B蓋（65・66），杯CⅠ（62），皿AⅠ（60・61），皿AⅡ，椀AⅡ（70），椀C（71・72），把手付有孔大型蓋（59），甕AⅡ（77），甕AⅢ（76），甕BⅠ（74・75），甕BⅡ，甕BⅣ（73），竈ほかがある。杯AⅡには，a_0・b_1 手法，杯AⅢには b_1 手法がそれぞれみとめられる。皿AⅠを除き，杯・皿類の大多数には螺旋・斜方射暗文がある。なお，杯AⅢの b_1 手法による1例には，通常の施文方向とはことなって，左回りに暗文をほどこしたものがある（63）。皿AⅠの調整手法には，
＊ a_0（60）・b_0（61）手法があり，ほかに c_0 手法もみられる。杯AⅢは，A形態，すなわち口縁下部が内彎する弧，上部がわずかに外彎する弧をえがき，口縁端部が内側に肥厚している。杯BⅡ（67）は c_1 手法で調整し，高台を付けたあと，底部外面全体をなでて仕上げている。内面の斜放射暗文は左回りにほどこしている。杯Cには墨書土器が1例ある（PL. 60—47）。

甕AⅡ（77）・甕BⅠ（75）は，全外面と口縁部内面とをハケメで仕上げている。甕BⅣの1
＊ 例（73）は，器体がやや扁平である点，把手が身にそわずに斜め上にむいている点で異例をなしている。なお，この土器は，2方に把手をもつものとして復原，図示したが，よく似た形態で，一方のみに把手をもつ実例が，平城京左京八条三坊遺跡で出土している[25]。把手付有孔大型蓋（59）は SK820 出土例（PL. 46—48）と大差ない。外面をヘラ磨きするものと不調整のものとがある。内面に黒色物質が付着したものがある。

＊ **須　恵　器**　SK2101出土の須恵器には，杯，皿，杯皿の蓋，椀，盤，高杯，鉢，壺，甕，　須 恵 器
がある。これらの土器はSK820 様式に共通する形態をもっているので個々の記述は省略する。

第Ⅰ群土器には杯AⅠ-1(Fig. 37—336・337)，杯AⅠ-2(338)，杯AⅡ(339)，杯AⅢ，杯AⅣ(340)，杯BⅠ，杯BⅡ，杯BⅢ（348），杯BⅣ，杯BⅤ（349），杯BⅠ蓋（356・357），杯BⅡ蓋，杯BⅢ蓋（347），杯BⅣ蓋，杯BⅤ蓋，皿AⅠ（343），皿BⅠ，皿BⅠ蓋（352・353），皿CⅠ（342），皿CⅡ（341），
＊ 椀A（351）がある。

第Ⅱ群・第Ⅲ群にぞくするものとしては，皿BⅠ蓋がそれぞれ1個ずつある（354・355）。第Ⅰ～第Ⅲ群以外の土器には，杯BⅠ1個，杯BⅢ蓋2個(345・346)，杯BⅣ蓋1個（344），杯C1個（350）がある。墨書土器は，杯AⅠ（PL. 60—48），杯BⅡ，杯B蓋（PL.60—49），杯BⅤ蓋（PL. 60—50）にそれぞれ実例がある。

＊　以下，他の器種を概観する。盤Aには，口縁部が通常の角ばった形状をしめすもの2個（361

25）奈良県・奈良国立文化財研究所『平城京左京八条三坊発掘調査概報』1976年，p. 31 写真。

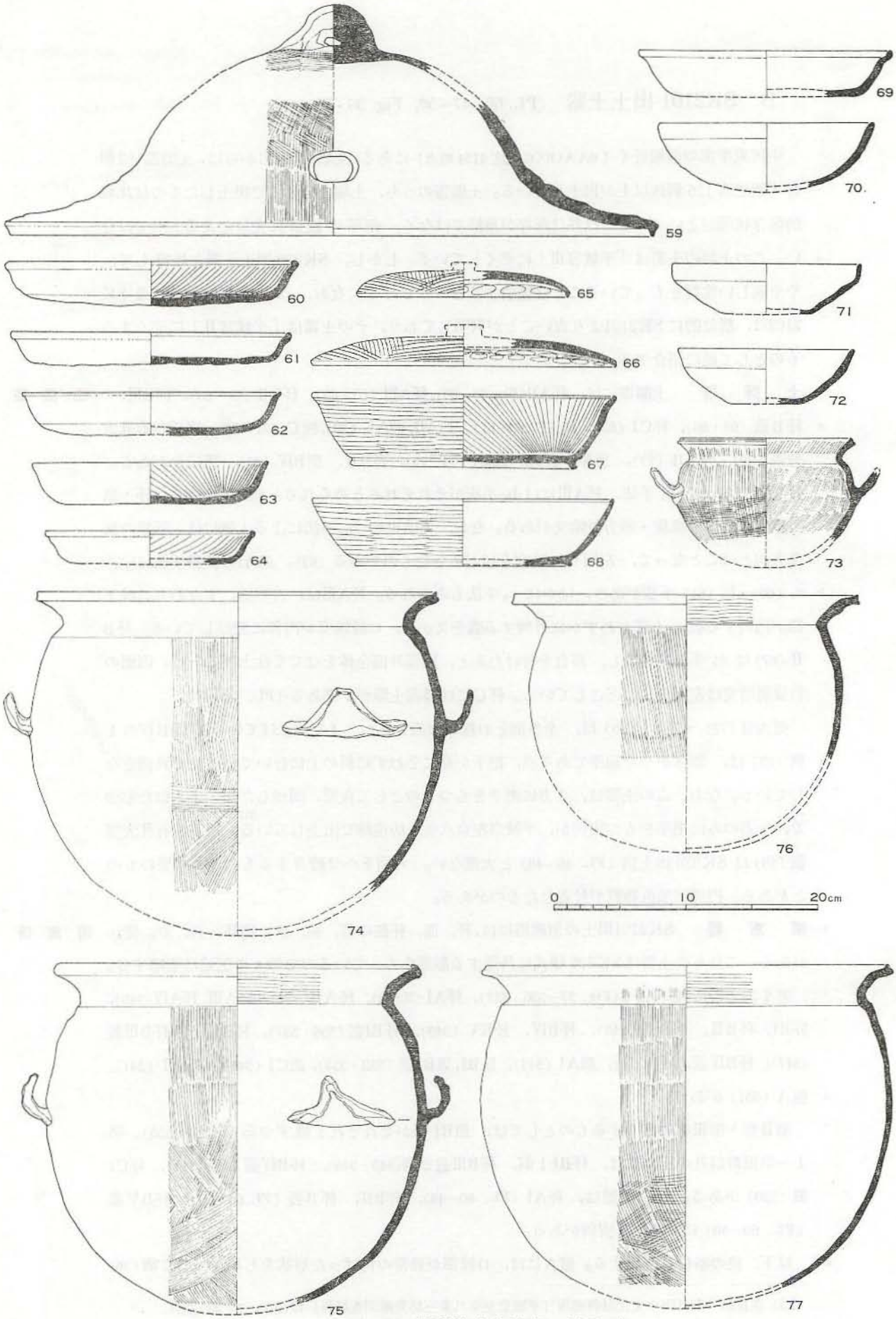

Fig. 36 SK2101 出土土師器　縮尺 1/4

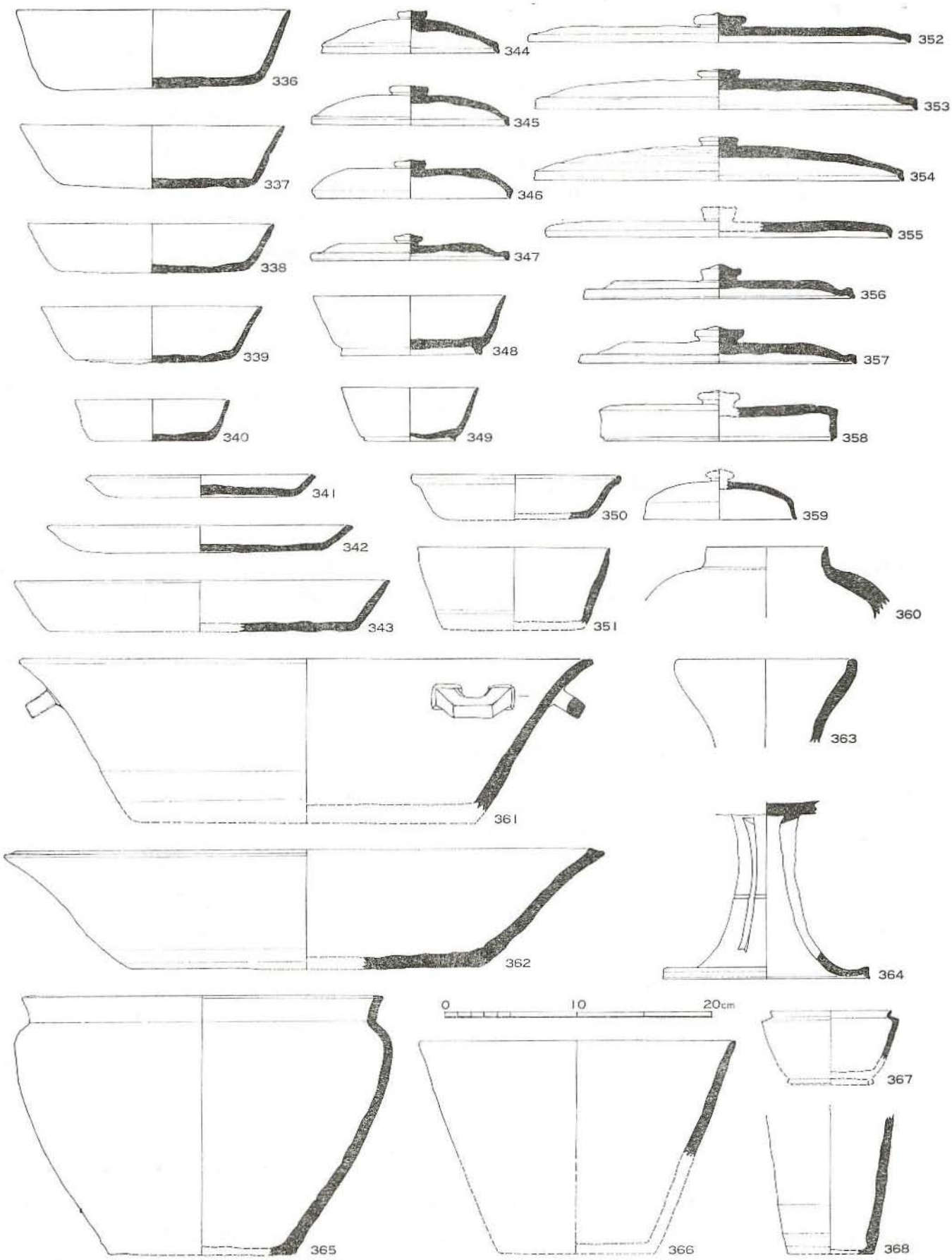

Fig. 37 SK2101 出土須恵器 縮尺 1/4

・362）と，まるくおわるもの1個とがあり，前者の1例には，横位の把手をつける。高杯(364)は3方に長い透しをいれた，脚台をのこすのみである。鉢E（366）は，底部から口縁部が斜め上にまっすぐのびてバケツ状を呈する器種（Fig.38—378参照）である。口縁部破片がある。壺A（360）の口縁部が1つある。肩の部分の厚さは口縁部の厚さの2倍以上もある。壺Aの蓋には，水平な頂部から縁部がほぼ直角におれさがり，縁端部の内端を下方にのばして外側に段を作るもの（358）と，まるい頂部から縁部が弓なりにおれまがり口縁部端面が内方に上る斜面をなすもの（359）とがともにみられる。壺Eは，下半を欠くが，肩幅が器高の2倍内外の，扁平な形態をもっている（367）。 *

壺G，すなわち，肩の張った丈高の器体から口縁部が短く立つとみられる器種の下半部の破片がある（368）。壺Gとみとめてよいとすれば，その最も古い実例にぞくすることになる。甕C（365）は6個ある。他に，大きく外反する口縁部の外面に，ヘラで十状の刻線を入れた甕A（PL. 62—82）がある。 *

C　Q地区整地層出土土器（Fig. 38）

西区の東北（6AAO区Q地区）には木炭を含む整地土が広範囲にわたってみとめられ，この層から「平城宮Ⅲ」にぞくする土器を多数検出した。ここには，SK820に完形品としてみない器種もあるので，須恵器の皿D（375），盤A（379・380），鉢A(373・374)，鉢E（378），壺A（370～372）・壺A蓋（369），壺E（377），甕E（376）を図示した。このうち鉢Aの1つ（373）と盤Aの1つ(380)は，それぞれ第Ⅱ群・第Ⅲ群土器にぞくすることがあきらかである。他はおそらくすべて第Ⅰ群土器にぞくするとおもわれる。 *

平城宮Ⅲ

D　SK2113出土土器（PL. 51・52, 60—44・46, Tab. 7・8）

中区東半部の東寄り（6AAO区G地区P30地点）にある土壙SK2113で出土した土器は427個体あり，このうち土師器は315個体（73.8%）・須恵器は112個体(26.2%)ある。土壙内の埋土は上下に区別できたが，土器には差違はなく，相互に接合できるものもあったので一括遺物としてあつかった。保存状態はあまり良好ではないが，細部の観察にはたえうるものであった。本土壙出土の土器はつぎにあげるSK870の土器とともに，「平城宮Ⅴ」の標準資料となるものである。 *

平城宮Ⅴ

土　師　器　土師器には，杯A，杯B，杯B蓋，椀A，椀C，皿A，皿B，皿C，盤B，高杯A，壺B，壺E，甕A～甕C，鍋Aがある。このうち，杯・皿・椀などの浅い器種は，色調・胎土・形態・調整手法によって2つの群に区別することができる。これを第Ⅰ・Ⅱ群土器とよびわける。[26] *

第Ⅰ群土器は，灰白色あるいは，白色を帯びた黄灰色・赤灰色など，いずれも白みがかった色調をもち，胎土はきめこまかい。これに対して第Ⅱ群土器は，灰褐色・茶褐色・赤褐色，うす緑がかった褐色など，褐色系の色調をもち，胎土は比較的あらい。

杯　A　H—a　杯A（PL. 51—78～80, 88・89）　第Ⅰ群土器にぞくする杯A（78～80）は，A形態，

26）平城京左京一条三坊の溝SD 485出土土師器（『平城宮報告Ⅵ』pp. 39)は平城宮Ⅱにぞくし，第Ⅰ・Ⅱ群土器を区別した。それとここでいう第Ⅰ・Ⅱ群との関連は検討中である。

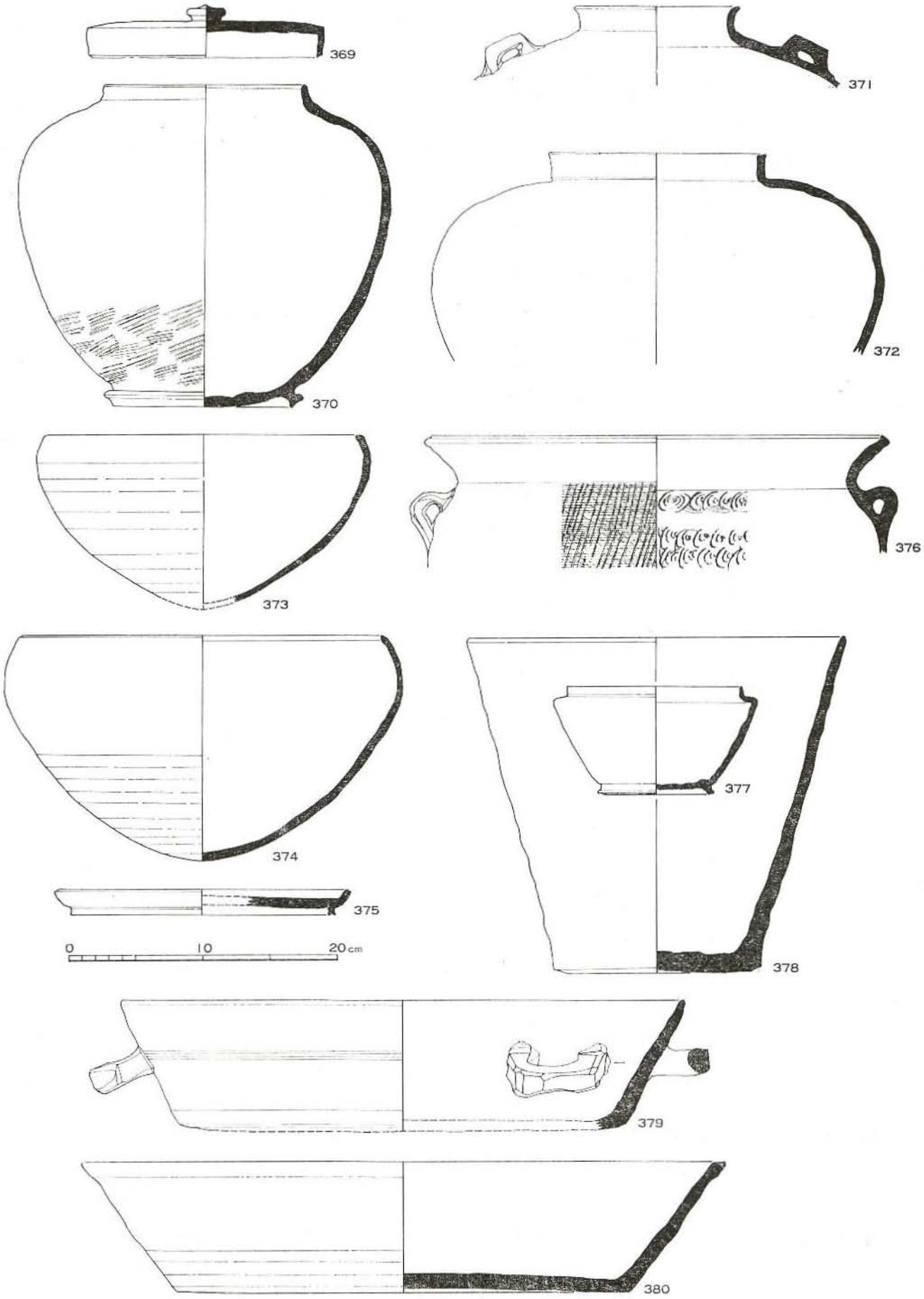

Fig. 38 Q地区整地層出土須恵器　縮尺 1/4

土師器		個体数			比率（%）		
食器	杯AⅠ	31			9.9		
	杯BⅠ	1	7		2.2		
	BⅡ	5					
	BⅢ	1					
	杯B蓋	2			0.6		
	皿AⅠ	30			9.6		
	AⅡ	95			30.4		
	皿B	2			0.6		
	皿C	1		274	0.3	87.5	
	椀AⅠ	83	87		27.8		
	AⅡ	4					
	椀C	13			4.2		
	盤B	2			0.6		
	鉢	1			0.3		
	高杯A	3			0.9		
	大型蓋	3			0.9		
貯蔵器	壺B	1		3	0.3	1.0	
	壺E	2			0.6		
煮炊具	甕A	33			10.5		
	甕B	1		36	0.3	11.5	
	甕C	1			0.3		
	鍋A	1			0.3		
	計	313			100.0		

須恵器		個体数			比率（%）		
食器	杯A	17			15.2		
	杯BⅠ	9					
	BⅡ	9					
	BⅢ	5					
	杯BⅠ蓋	6	28		25.0		
	BⅡ蓋	9					
	BⅢ蓋	2		58		51.8	
	BⅣ蓋	1					
	BⅤ蓋	4					
	杯C	4			3.6		
	皿B	2			1.8		
	BⅠ蓋	4			3.6		
	皿C	2			1.8		
	鉢A	1			0.9		
貯蔵器	壺A	1			0.9		
	壺A蓋	2			1.8		
	壺G	2			1.8		
	壺L	1			0.9		
	その他の壺	16		54	14.3	48.2	
	浄瓶	1			0.9		
	平瓶	1			0.9		
	甕B	9			8.0		
	その他の甕	21			18.8		
	計	112			100.0		

	土師器	須恵器	計
食器	274 (82.5) (87.5)	58 (17.5) (51.8)	332 (78.1)
貯蔵器	3 (5.3) (1.0)	54 (94.7) (48.2)	57 (13.4)
煮炊具	36 (100.0) (11.5)	0	36 (8.5)
	313 (73.6)	112 (26.4)	425

Tab. 7 SK2113出土土器の構成

群＼手法	a 個体数	a %	b 個体数	b %	c 個体数	c %	合計
第Ⅰ群	26	(35)	45	(61)	3	(4)	74
第Ⅱ群	1	(1)	3	(4)	76	(95)	80

Tab. 8 SK2113出土土師器杯・皿・椀の群別と手法

すなわち口縁下部が内彎し，上部がわずかに外彎する形態をそなえており，口縁部が内側にまるく肥厚している。杯AIのみであって，杯AIIほかはみられない。

いっぽう第Ⅱ群土器の杯Aは，口縁部全体が内彎する弧をえがく形態であって，端部の内側への肥厚は小さくて目だたない。杯AIのみである（88・89）。第Ⅰ群土器の杯AIは，a_0（木ノ葉の圧痕なし）・b_0 の両手法によるものが大多数を占めており，c_0 手法で調整したものは1例にすぎない。これに対して第Ⅱ群土器の杯AIは，b_0・c_3 手法によっているが，後者によるものが多い。 *

杯　B　*H*—b　杯B（90・91・107）　杯BI（90）・杯BII（91）・杯BIII（107）が1個体ずつある。前2者は第Ⅰ群，後者は第Ⅱ群土器にぞくしている。いずれも c_3 手法によっているが，杯BIIの削りは不徹底で口縁部上半にはおよんでいない。 *

杯　B　蓋　*H*—c　杯B蓋（84・85）　杯BIIの蓋（85）と，杯BIIIの蓋（84）が1例ずつある。前者は，頂部と縁部とをわけてヘラ磨きしている。後者は保存がわるく，調整手法はわからない。

椀　　A　*H*—d　椀A（95・96・104・105）　椀AI（104・105）・椀AII（95・96）に区別できる。

このうち椀AIには，第Ⅰ・第Ⅱ両群にぞくするものがある。第Ⅰ群の椀AI（104）は口縁端部が丸く終っている。c_3手法によるものが多く，そのほかa_3手法もみられる。第Ⅱ群の椀AIは，第Ⅰ群のそれにくらべてやや器高が高く器壁が薄い。口縁部端面がわずかに内側に傾斜するものがある（105）。調整手法は，やはりa_3・c_3手法である。椀AⅡ（95・96）は，ともに第Ⅱ
＊ 群土器にぞくしている。c_3手法によっている。

H—e　椀C（93・94）　e手法によっている。胎土はあらく第Ⅱ群土器ともみられる。しかし，この手法と胎土とはSK2113出土品にかぎらず椀Cに共通する特徴であって，ただちに第Ⅱ群土器としてあつかうことはできない。　椀　C

H—f　皿A（81～83・86・87・97～100）　皿AI（97～100）と皿AⅡ（81～83・86・87）とにわ　皿　A
＊ けられる。第Ⅰ群土器の皿AI（97・98）は，A形態で，b_0手法によるものが多く，これについでa_0（木ノ葉の圧痕なし）手法もみられる。底部下面の一部に布痕をとどめるものが1例ある。これに対して第Ⅱ群土器の皿AI（99・100）は，B形態であって，端部の内側への肥厚も小さい。c_0手法のみである。第Ⅰ群の皿AⅡ（81～83）は，皿AIとよく似た形態であるが，内側に傾斜する口縁部端面を形成することが特徴的である。ただし暗文をもつ唯一の例（82）は，口縁部
＊ がまるくおわっており，底部に布痕をとどめている。第Ⅱ群の皿AⅡ（86・87）は，第Ⅰ群のそれよりもやや小さく，口縁部全体が内彎する弧をえがき端部をまるく仕上げている。大多数はc_0・c_3手法で仕上げているが，a手法によるものもある。器壁が薄い。その1例には，底部内面に粗い螺旋暗文をほどこしている。しかし口縁部内面には斜放射暗文はない。

H—g　皿B（92・106）　皿BI（92）と皿BⅢ（106）とがある。前者の帰属は決定できない　皿　B
＊ が，後者は第Ⅰ群土器にぞくしている。

H—h　皿C（101）　小型の皿である。内面と口縁部外面とを右まわりに横になで底部外面　皿　C
は不調整のままに残している。

H—i　盤B（PL. 52—116）　広い底部と斜上に大きくひらく口縁部とから成る大型の器種である（口径 36.1cm，高さ 8.8cm）。底部と口縁部との境界に高台をつける。口縁部の内外面を　盤　B
＊ よこなでし，外面はヘラ磨きしている。

H—j　高杯A（PL. 51—103）　杯部外面は横方向にヘラ磨きする。脚台柱状部は8角形に　高杯　A
面取っている。内面にはシボリメがのこり，脚部裾の内面にはハケメがある。

H—k　壺B（PL. 51—102）　上端がややすぼまる扁平な器体に，短く外反する口縁部をつけた広口の器種である（口径18.2cm，高さ10.0cm）。内面および口縁部外面をよこなでしてい　壺　B
＊ る。体部外面は平滑であるが，成形時の凹凸をそのままとどめている。

H—l　壺E（109）　SK870出土の1例（PL. 53—125）と同様須恵器の壺E（PL. 49—329, PL. 53—405・406）の形態をうつしたものであるが，本例は，口頸部の屈曲がするどさを欠き，また肩以下のカーブもまるみをもつなどやや通常の形態から離れている。体部外面をていねいにヘラで磨いている。　壺　E

＊ *H*—m　甕A（PL. 51—108, PL. 52—110・111）　甕AⅡ（口径24cm前後，高さ25cm前後）・甕　甕　A
AⅢ（111；口径18cm前後，高さ19cm前後）・甕AⅣ（110；口径 15cm前後，高さ 16cm前後）・甕AⅤ（108；口径14cm前後，高さ13cm前後）にわかれる。ともに，外面にハケメをとどめ，二次的な火熱で変色し，煤が付着している。内面は手でなでつけている。甕B（113）は，外面をハケ　甕　B

メで仕上げ，内面は手でなでつけている。口縁端や把手が磨耗している。煤が付着している。

甕　C　甕C（114）は，口縁部内外をよこなでしている。器体の内外面にはハケメをつけ，外面下半はさらに，ヘラ削りで仕上げている。煤がついている。

鍋　A　*H*—n　鍋A（115）　半球形に近い器体の上に，外反する口縁部をつけた広口の器種である。内面に当板の同心円文が残っており，須恵器の技法との関連が注意をひく。　*

須　恵　器　須恵器には，杯A，杯B（PL. 51—387・388），杯B蓋（383～386），杯C（391・392），皿B（394），皿B蓋（381・382），皿C（393），鉢A，壺A（390），壺A蓋（389），壺G，浄瓶（395），平瓶の提梁，甕Bがある。口頸部・底部を欠くために器種の細別を決しがたい壺として，壺Lと推定されるもの（396）と，双耳壺（PL. 52—399）などがある。双耳壺の把手は断面円形の半環状の部分の下に突出部分をもうけて耳形にしている。　*

E　SK870 出土土器　（PL. 52・53, 60—63～67・69・70）

中区東半部東端（6AAO区D地区S20地点）にある土壙SK870から出土した土器は，保存状態がよくないので個体数をあげることはできない。しかし，前述のSK2113出土土器とともに，

平城宮V　「平城宮V」の代表例の1つである。

土　師　器　杯AI（PL.53—119），杯BI（121），杯BII（122），杯BIII（123），杯B蓋（126），皿AI（117・118），皿AII（120, PL. 60—64・69），皿C（127），椀AI（124），椀AII，椀C（PL. 60—65），盤B，高杯A（129），壺E（125），甕A（PL. 52—112, PL. 53—128），甕Bがある。　*

杯と皿　このうち杯AIには b_0・c_3 手法，皿AIには a_0・b_0手法，皿AIIには b_0・c_0手法，椀AI・椀AIIには c_3 の各手法がそれぞれみとめられる。

杯AIは口径19.0cm であって，SK219様式の杯AIよりもやや小さい。皿AI・皿AIIには，SK2113様式の皿におけると同様，第I群・第II群土器が識別できる。このうち第I群土器にぞくする皿AIは，口縁上部がわずかに外彎し，端部が内側にまるく肥厚するものであって，b_0 手法によっている（117）。これに対して，第II群土器の皿AIは，口縁部全体が内彎するカーブをもつものであって，口縁端部もまるくおわっている（118）。c_0 手法によっているが，なかには削りが口縁部上端にまでたっしていないものもある。第I群土器の皿AIIは，口縁部端面が内傾し（120），b_0 手法によっている。第II群土器の皿AIIは，口縁端部がまるくおわり，c_0 手法で仕上げている。なお，杯・皿類には，いっさい暗文がない。盤Bは，口縁部の破片のみである。内外面ともヘラで削ったのち，ヘラ磨きしている。高杯Aには，脚部を成形する際に，棒を軸にして作ったものと，そうでないものとがともに存在する。甕は全外面と口縁部の内面とをハケメで仕上げ，内面は手でなでつけている。　*

墨書土器は3例ある（PL. 60—64・65・69）。

須　恵　器　SK870出土の須恵器には，杯A（425～427・429・430），杯B（419～422），杯B蓋（415～418），杯C（433），杯E（428），皿B（413），皿B蓋（411），皿C（431・432），皿D（412），鉢A（409・410），盤A（PL. 52—397），高杯（PL. 53—414），壺A蓋（423・424），壺E（405・406），壺G（408），壺L（401～403），水瓶（404），平瓶（407），甕C（PL. 52—398）などがある。食器類の浅い器種の大多数はさきにSK820様式で指摘した第I群土器にぞくしてい　*

るが，皿には第Ⅲ群土器にぞくするものがあり，ほかに3群以外の土器が少数ある。

杯Aは，口径・高さによって，杯AⅠ・杯AⅡ(425)・杯AⅢ(426・427・429)・杯AⅣ(430)にわける。SK820様式の第Ⅰ群土器の杯Aと比較すると，杯AⅠ・杯AⅡの器高はやや低く，また，杯AⅠ～杯AⅢの口径は小さい。 杯 A

* 杯Bは寸法によって，杯BⅠ(419)・杯BⅡ(420，PL. 60—67)・杯BⅢ(421)・杯BⅣ(422，PL. 60—70)・杯BⅤにわける。SK820須恵器第Ⅰ群土器の杯Bと比較して杯BⅠ・杯BⅡは口径が小さく，また高台はするどさと力をやや欠いており，外方というよりもむしろ下方に短くのびているという表現が適切なものも多い。脚端面が水平をなすもののほかに，内傾または外傾のものがある。しかし，この斜面はSK820 須恵器第Ⅰ群土器杯Bの高台におけるほど大きな角度を
* なすものはない。また高台を底部外端に接してつけたもの(422)もある。 杯 B

杯B蓋(415～418)のうち第Ⅰ群土器にぞくするものは，すべてA形態である。下方へ突出する縁部は短く，するどさを欠くものも多い。また，外端面はいずれも外傾しており，内傾のものはない。つまみ頂部の形状は，扁平なものもあるが，やや山高くなったものも多い。杯BⅠ蓋(418)・杯BⅢ蓋(416・417)・杯BⅣ蓋(415)にわけられる。 杯 B 蓋

* 杯C(433) SK820様式のものと比較して口径が小さく，また，口縁部はつよく外反し，口縁端部はまるく仕上げて巻きこみの形状を表現している。実際には巻きこんでいない。3群以外にぞくするものとみられる。 杯 C

皿BⅡには，須恵器第Ⅰ群土器にぞくするもののほかに，第Ⅲ群土器の実例が1個(413)ある。この土器の高台は短く，端面下端は内傾する。内面に当板の同心円文をとどめている。 皿 B
* 底面の内外を硯として使用しており，磨滅し，墨の痕がある。皿BⅠ蓋(411)は，縁部の下方への突出が短く，するどさを欠いている。

ほかに，皿CⅠ(432)・皿CⅡ(431)，低い高台をそなえた皿D(412)がある。盤A(PL. 52—397)は口縁部が角ばった，ふつうの形態のものである。盤Aの一例に「内裏盛所」の墨書をもつものがある(PL. 60—63)。 皿C・皿D 「内裏盛所」

* 壺Aの蓋(423・424)は3個あるが，いずれも頂部中央とつまみとを失っている。縁部内端を下方に突出させ，外側に段を形成しているものがある(424)。 壺 A 蓋

壺L(401～403)は，3個体ある。先に報告したSK217出土例[27]と同様，かなり扁平な器体をもつもの(401)，これと，長手の器体をもったSE311-B・SK234出土例[28]との中間的な形態をもつもの(402・403)とがある。ともに口頸の基部は2段構成である。壺G(408)は，縦長の器
* 体に，太く長い口頸部をのせたものである。口縁部・底部を欠くがこの器種の初現の例として注意をひく。ロクロ上で器体から口頸部までを一気に挽いて作っており，内外全面にロクロ痕跡が明瞭にのこっている[29]。なお，ほかに底部をふくむ壺の破片がある(400)。 壺 L 壺 G

水瓶(404)は，細い筒形の頸部をとどめるのみである。中央に2条の凹線をめぐらしている。愛知県猿投山古窯の製品である。水瓶には，口頸部と肩の一部とをのこす破片と口縁部の
* 破片とがある。口縁端部は小さくまるく外反する。他に平瓶・甕Cがある。 水 瓶

須恵器の墨書土器は5例ある(PL. 60—63・66・67・70)。

---

27)『平城宮報告Ⅱ』PL. 47—29。
28)『平城宮報告報告Ⅳ』PL. 39-210，41-255。
29) 長岡京 SD51出土の壺Gは，2段構成になっている(p. 140 注14文献参照)。

F　SK2102出土土器（PL. 60—53, 62—83, Fig. 39）

中区東半部の南端近く（6AAO区G地区J34地点）にあるSK2102は，層位的にSK2101より古い（Fig. 18）ことが判明している。この土壙から出土した土器は少量であるが，「平城宮Ⅱ」にぞくする資料としてかかげておく。

土師器　土師器には，杯CI（Fig.39—130），甕（131・132）ほかがある。杯CIは底部外面を1方向にヘラ削りした b_0 手法によっており，内面には暗文がある。 *

須恵器　須恵器には，杯BⅤ（438），杯BⅠ蓋（436），杯BⅡ蓋，杯BⅢ蓋（435），杯BⅤ蓋（434），椀AⅠ（437），鉢A（PL. 62—83），甕A（439），甕B（440）などがある。杯B蓋にはA形態のものがある。A形態としてはおそらく初現的なものであって，SK820様式のそれと比べて縁部の屈曲がなお明確ではない。なお，つまみの径は蓋の径に比べて大きく，頂部はまるみをもっている。 *
多くは第Ⅰ群土器にぞくしている。しかし，杯BⅤ・椀AⅠは第Ⅰ～Ⅲ群土器以外に帰属するであろう。なお杯BⅡ蓋の1例に「□盤」の墨書がある（PL. 60—53）。

鉢A（PL. 62—83）は，底部がかなりまるくなってはいるとはいえ，なお平底の名残りをとどめている。焼成後，底部下端近くに「寺」と線刻し，まわりに墨で円を描く。甕Aは口縁部内外に黒色物質をぬっている。 *

線刻の「寺」

甕Bは2例あり，ともに口縁端部を内側にわずかに肥厚させている。須恵器の平行線叩目は木目に平行する刻線によってなっているものが大部分である。しかしSK2102出土の甕A・甕Bの各1例および細別器種不明の甕1例の器体外面の叩目の刻線は，すべて木目にたいして斜交する点で共通している。

両側に把手をつけた大型鉢は，小破片ながら，注意すべき器種である。 *

G　SE715 出土土器（PL. 54, 61—71・73）

東区の東南（6AAB区U地区M39地点）にある井戸SE715の底から出土し，平安時代初期，おそらく平城上皇死去頃に埋没したとみられる「平城宮Ⅶ」の土器である。土師器・須恵器のほか灰釉陶器が1点ある。

平城宮Ⅶ

土師器　土師器には，杯A，杯B，皿A，椀，高杯，甕がある。いずれも微小な砂粒を含む赤褐色の胎土から成っており，各器種のしめす特徴は，SE311-Bの土師器[30]のそれにほぼ一致する。 *
杯AⅠ（136～139）は7個体あり（口径16.2～18.2cm，高さ4cm前後），すべて c_0 手法によっている。
杯AⅡ（140～144）は6個体あり（口径12.5～14.1cm，高さ3cm前後），a_1・c_0・c_1・c_3・e の各手法によるものである。

杯Bには，口径が20cmをこえるもの（133）と，17cm前後のもの（134・135）とがある。杯B *
には「醴大郎　炊女取不得若取者笞五十」と墨書したもの（PL. 61—71），杯AⅡには「廣」と墨書したものがある（PL. 61—73）。なお形態上，椀Aに近い小型の器（口径5.7cm，高さ2.2cm）が1点ある（145）。c_0 手法による。皿A（146・147）は2個体ある（口径20cm，高さ2cm前後）。

「醴大郎」

30）『平城宮報告Ⅳ』，pp. 24，PL. 38。

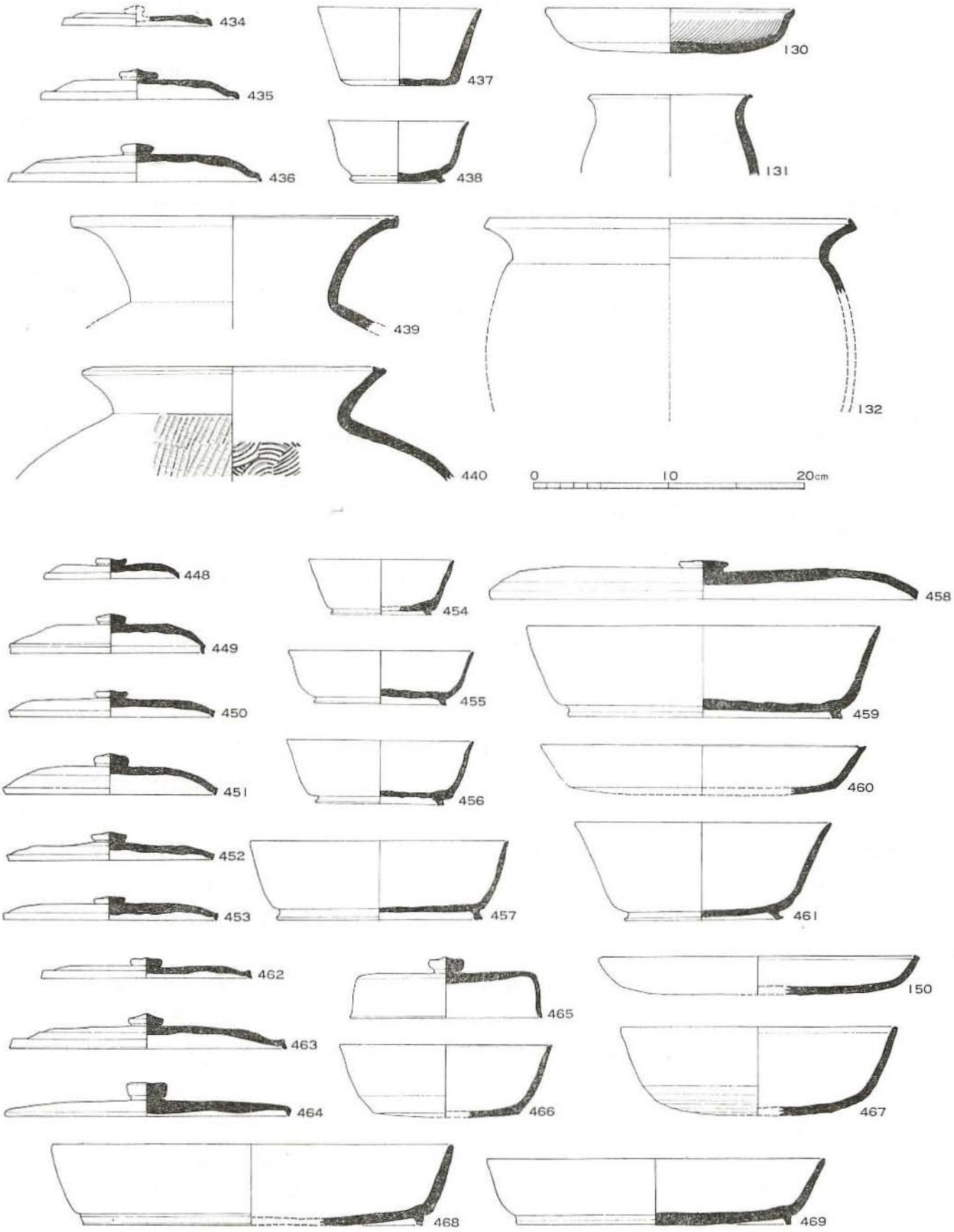

Fig. 39 SK2102出土土器（130～132 土師器，434～440 須恵器） SD2126・SD2110 出土土器（150 土師器，448～469 須恵器）

高杯は，杯部の小破片であって，その内面に粗い斜放射暗文がある。甕は，体部が筒形をなし，内外面に凹凸がのこる粗製品である。

須恵器　須恵器には，杯BⅣ（441），蓋，把手付瓶（442），長手の壺の器体（443）がある。杯BⅣの口径は，SK870のそれに比べてやや大きい。把手付瓶は口頸部を欠くが，球形の体部に高台をつけ，口頸部との接合方法は2段構成によっている。肩に環状の把手が1つだけつく。自然釉 *
がかかっており，猿投山古窯の製品であろう。

灰釉陶器　灰釉陶器椀（501）　白色良質の胎土を用い，口縁部の内面全面に，黄緑色の灰釉をかける。外面には釉を見ない。

H　他の遺構・包含層出土土器（PL. 54・61，Fig. 39・40）

SE2128出土土器（PL. 54—148・149・444）　中区東半部の東北（6AAO区G地区U24地点）にある井戸(SE2128)から出土した土師器皿AⅡ（148）は a_0 手法，杯A（149）は c_0 手法によってお *
り，おそらくは「平城宮V」にぞくしている。須恵器杯A（444）も同時期のものとみてよいであろう。

平城宮V

SD2126・SD2110出土土器（Fig. 39—150・448～469）　SD2126は中区東半部の東北にあり，上記のSE2128の周囲を方形にかこむ溝であり，またSD2110はSD2126の内側からはじまって *
南に流れる溝である。この両溝から出土した土器のうち，須恵器にかんしては「平城宮Ⅰ」と「平城宮Ⅲ」とがみられる。土師器は保存がわるく，特徴をつかみがたい。

平城宮Ⅰ　「平城宮Ⅰ」の須恵器には，杯BI(457)・杯BⅢ蓋（449～453）・杯BⅣ（455・456）・杯BⅤ(454)・杯BⅤ蓋（448）・深い形態の杯BI（461），皿BI蓋（458），皿BⅡ（459），皿CI（460），壺A蓋ほかがある。すべて第Ⅰ群土器にぞくしている。杯Bの高台が外方にふんばっていること，皿 *
Cの底部を削っていること，そして杯皿の蓋にはまだA形態はなく，すべてB形態にぞくしていることなどを古い性質としてあげることができる。ただし，「平城宮Ⅰ」の未発表資料SD1900下層の杯B蓋と比較すると，つまみの径が小さい。

平城宮Ⅲ　「平城宮Ⅲ」にぞくする須恵器，第Ⅰ群土器には各種の器種がある。ここには，杯BI蓋(463)・杯BⅢ蓋（462）・皿BⅡ（469）を図示するにとどめた。第Ⅱ群にぞくするものとしては，杯E *
（466）と，土師器の杯に似た形状の杯（467）とがある。この2個はSK820出土の須恵器第Ⅱ群土器とは形態がことなっているので，あるいは，「平城宮Ⅱ」にさかのぼるかもしれない。また第Ⅲ群土器には，杯BI蓋（464）・皿BI（468）ほかがある。土師器の1例として皿AI（150）を図示する。なお，須恵器の壺Aの蓋(465)はどの段階にぞくするか明確でない。墨書土器は，SD2110から1例，SD2110・SD2126のいずれからか2例（PL. 60—55・56）出土している。す *
べて須恵器である。

SB501柱穴出土土器（PL. 54—445・446）　中区西半部西南端にある（6AAO区R地区）SB501の北側柱列西第4柱掘形から，おそらく「平城宮Ⅰ」，くだっても「平城宮Ⅱ」にぞくする須恵器杯BⅢ（445）が出土している。器高が低く高台は外にふんばっている。いっぽう同じ建物の南側柱列西第4柱の柱抜取り穴からは，「平城宮Ⅲ」にくだる須恵器杯BI（446）が出土して *
いる。個体数がすくないが，SB501の造営年代にかかわる資料としてあげておく。

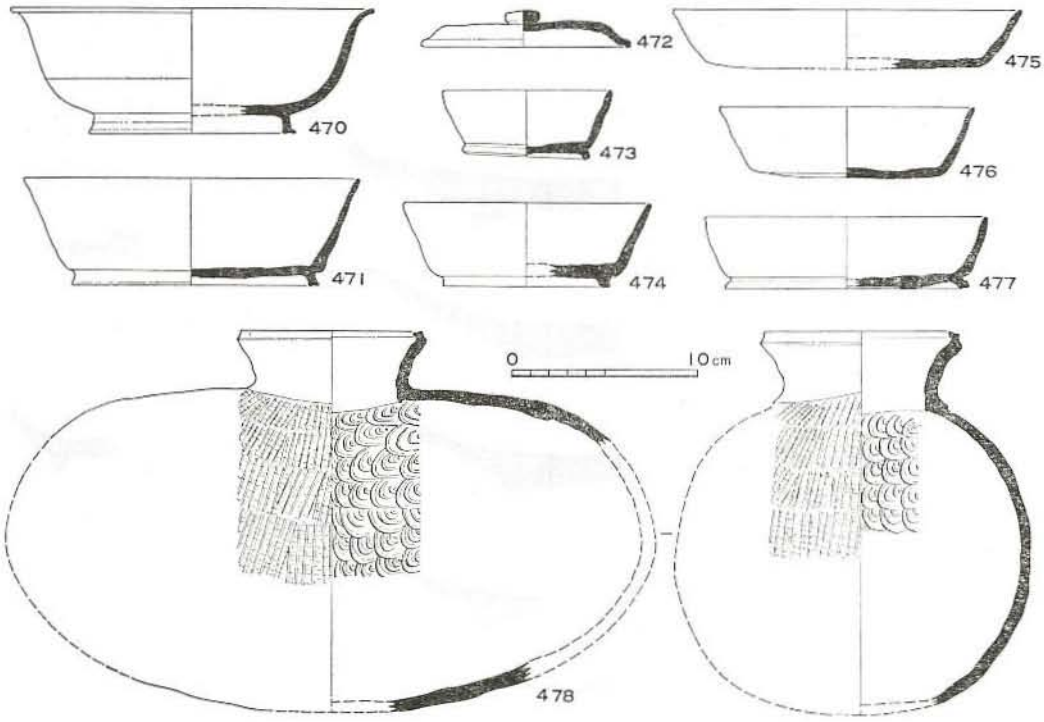

Fig. 40 SD487ほか出土土器　470 U地区S38地点出土，471～478 SD487出土（471～474平城宮Ⅴ，475～478平城宮Ⅲ）縮尺 1/4

SB960出土土器（PL. 54—447）　中区東半部西寄り（6AAO区K地区）のSB960の西側柱列南第4柱の柱抜き取り穴から濃い青灰色，硬質の大型甕B（口径 111cm，高さ復原 90.6cm）が1個出土した。全体に器壁は厚い。口縁部外面の叩き目は横になでて消している。

以上かかげた土器のほかに，SD487，すなわち内裏北外郭南築地SA488の南側溝から出土
＊ したものには，「平城宮Ⅲ」（Fig. 40—475～478）・「平城宮Ⅴ」(471～474）がふくまれている。また，中区東半部東北寄り（6AAO区）SE2139には，平城宮Ⅵの土師器がある。

このほか，形態の上で注意をひく個体として，U地区S38地点含炭包含層で出土した銅鋺形の須恵器がある（Fig.40—470)。杯部・高台ともにきわめて平滑に仕上げている。　銅鋺形須恵器

Ⅰ　鉛釉陶器（COLOR PLATE 2—2, PL. 56, Fig. 41)

＊ 三彩・二彩・緑釉単彩などの鉛釉陶は，少数ながら，各地区の井戸・土壙・溝・包含層などから出土している。いずれも破片であって，しかも遺存状況の良くないものが多い。しかし，これらのうちには，伴出遺物によって絶対年代が知られるものをふくむ点で重要である。

三彩釉陶器には，壺Aの蓋（COLOR PLATE 2—2, PL. 56—1, Fig. 40—5）がある。小型　三彩釉陶
(径復原5.5cm，高さ復原1.5cm）であって，頂部中央には低い宝珠形のつまみ（径1.5cm，高さ0.4
＊ cm）がついている。胎土は軟質で灰白色を呈し，全面をロクロでなでて仕上げている。外面には緑・褐・白の三彩釉を，内面には白色単彩の釉をほどこしており，光沢をはなつ優品である。表裏全面にわたってこまかい貫入がある。なお内面には，釉をかけて焼成する際にもちいた三叉トチ（1辺3cm）の痕跡がのこる。

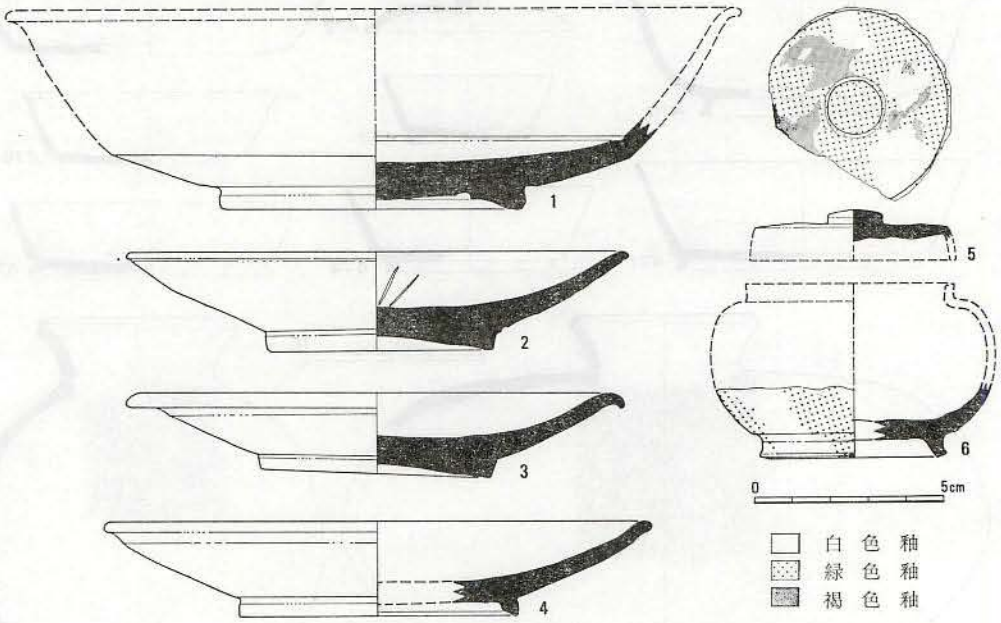

Fig. 41 鉛 釉 陶 器　　縮尺 1/2

二彩釉陶　二彩釉陶器には，小型の壺Aの底部破片（6）と，壺か瓶の体部破片とがある。壺Aの底部は，丸い体部に低い高台をつけたものであって，高台の脚端面は内傾している。胎土は軟質，黄灰色で，体部の内外面をロクロ上でなで，底部外面をロクロ上で削っている。体部の外面には，緑・白の二彩釉を，内面には白色の釉をほどこしている。ただし小破片であるため，本来は三彩釉陶であったかもしれない。表裏に貫入がある。6 AAB区 U地区 S 47 地点の小穴で出 *
土した。なお，奈良市七条山，岡山県大飛鳥出土の類例からこの壺Aの全形を復原すると，上記の蓋とちょうど組み合うほどの大きさとなる。壺あるいは瓶とみられる体部破片は，軟質黄灰色の胎土をもち，外面に緑・白の二彩釉，内面に白色釉をほどこしている。6 AAO区 M地区 N52 地点 黄褐色土から出土したものである。

緑 釉 陶　緑釉陶器には，稜椀（1），皿（2～4），蓋がある。稜椀は，削り出しの蛇ノ目高台をもち， *
胎土はやや軟質であって，黄灰色を呈する。口縁部外面の下半をロクロ上で削り，内面はへらで磨いている。器全面に淡い黄緑色の釉をほどこす。貫入がある。底部の内外面には，三叉トチ（1辺5.0cm）の痕跡をとどめ，また，内面の釉の下には，輪状の凹み（輪状痕跡）がある。6 ABB区 B 地区 S 82地点の井戸SE511で出土した。

皿には，切り高台をもつもの（2・3）と，貼り付け高台をもつもの（4）とがあり，いずれ *
も硬質である。貫入がある。2の口縁部内面には，施釉前にへらで2直線をひいており，また底部の内面には，やはり施釉前についた輪状痕跡をとどめている。3・4の内面はへら磨きしている。また，4の底部内外面には，三叉トチ(一辺5.1cm）の痕跡がある。2は6ABB区 C地区 F 86地点 SK530出土（口径13.4cm，高さ2.6cm），4は6ABB区 B 地区 Q82 地点の床土出土（口径14.5cm，高さ2.5cm），3は6AAO区 I 地区 F 47地点SD487出土(口径13.2cm，高さ2.2cm)。 *

蓋は頂部破片である。軟質，黄褐色の胎土をもち，ロクロなでののち，内外両面をヘラで磨いている。黄緑色の釉をかける。6 AAB区 U地区M 44地点の地山上出土。

J　硯 (COLOR PLATE1—2, PL. 55・56, Fig. 42・43)

陶硯が17点出土した。[31] 台付円面硯14点，鳥形硯１点，宝珠硯１点，双脚円硯１点である。これ以外に，須恵器の杯B蓋の内面を硯として代用したものが多数あり，また，須恵器皿Bを転用したものもある (PL. 53—413) が，ここでは杯B蓋をもちいた代表例のみをかかげる。

台付円面硯

＊　台付円面硯 (PL. 55—1～7・10～13) 普通の円い台をそなえた圏足(円面)硯と，獣脚の形式化した蹄脚 (円面) 硯とがある。圏足硯 (1～7・10) はすべて硯部と台部とを連続的に成形する。陸と海の区別が明確なもの (1・4・6・7)，不明確なもの (2・3・5) があり，前者には陸の周囲に低い内堤をめぐらすもの (1・4・6) と，これのないもの (7) とがある。硯部の外端にめぐらす突帯は１条のものがほとんどで，２条のものは１例 (4) にすぎない。圏足には長方形の透し孔をあけ，脚には文様をほどこさないもの (1・3・5・6) が多い。しかし透孔の上辺をまるく作るもの (7)，脚の中央に縦線文を加えたもの (10)，透孔の左右および下に縦線文をほどこすもの (2)，十字形の透孔をあけたもの (4) もある。以上にあげた形態と装飾の変化は時期的変化と製作地の差によるものもふくむと思われる。

圏足硯

蹄脚硯A

平城宮出土の蹄脚硯はA・Bの２種に大別できる。蹄脚硯A (Fig.42)は，硯部と台部基底と＊を別々に作り，両者を多数の脚で結合したものである。台部基底は偏平な輪であり，硯部は概形を作ったのちにくぼませて海と外堤とを形成する。脚部は，球を下方へひきのばしたような形の脚頭と，三角柱の脚柱とからなり，両者の間に水平な三角板状の脚節がある。脚頭と脚節には型作りのものがある。硯部外面の下端近くに脚柱を接続する。その際，硯部外面の下端にめぐらした１条の突帯が脚頭を受ける機能をもっている。硯部・脚部・台部基底の三者を別個に作って合成するため，当然のことであるが，接合部の内面には段落ができる。＊

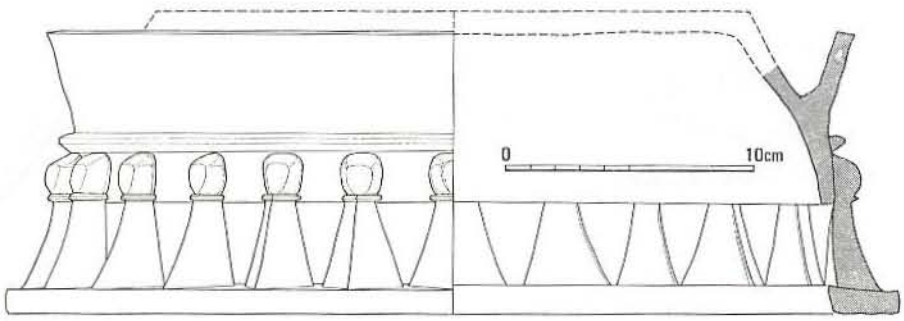

Fig. 42　蹄脚硯 A　　縮尺 1/3

蹄脚硯B

蹄脚硯B(PL. 55—11～13) は，硯部と脚部とを連続的に成形したものである。多くの場合，台部下半の外側に粘土を分厚く巻いて安定した基底を形成したのち，逆三角形ないし逆台形の透孔をえぐりとって，三角柱状の脚柱を作り出している。この時，三角柱の内面両端を篦で削って面を取るため，断面五角形の脚をなすものが多い。脚柱の上端に型作りの脚頭と脚節とを貼り付ける。脚頭は半球状を呈している。硯部外面の下端に突帯を２～３条めぐらすが，蹄脚硯Aの場合とは異なり，脚頭を受ける機能をうしなって単なる装飾と化している。＊

今回の調査で出土した蹄脚硯は４点である (11～13)。すべて蹄脚硯Bに属する破片である。

31)　硯の出土地点については p. 109—(41) を参照されたい。

台部基底は分厚く，断面が逆台形をなすもの，五角形をなすもの（11）がある。前者の1例には巻きつけた粘土の一部が剥落しており，成形方法の明瞭なもの（13）がある。

鳥形硯　鳥形硯（PL.56—15）は，小判形の平面をもつ硯面の前方に鳥の頭をつけた硯である。4脚をもつ。硯面前端には削り出した段によって小判形の海を作り，粘土を貼り付けた高い内堤によって陸と画している。陸は全体があさい凹面をなし，ことさらに外提は作らない。鳥の頭は前方にのび屈曲して立ちあがる頸部とそれにつづく頭部とからなり，頭部前頂には，とさか状の突出がある。目は点であらわす。嘴は欠けている。脚は痕跡をとどめる程度であるが三脚が残り，いずれも断面円形のものである（全長16.8cm，硯面長径12.5cm，短径9.8cm，高さ約5cm）。鳥形あるいは亀形硯は本来，蓋の付くものであり，平城宮6AAF区A地区B52地点（第22次南調査）の溝SD3410（Fig. 43—2），平城京左京八条三坊遺跡[32]（Fig. 43—3）や和歌山県大日山I遺跡[33]（Fig. 43—1）などから類例が出土している。

宝珠硯　宝珠硯（16）は，円形に近く，1端に尖頭をもつ平面形を呈することによって，宝珠硯の名でしたしまれているものである。円い花弁6個に，尖った花弁1個をくわえた形状であって，となりあう弁のなす凹みは7個である。この硯の海と外提とは一部をとどめるにすぎないが，全形をほぼ知ることができる。陸はよく磨滅しており周辺に墨をとどめている。陸の周囲は海であるが，海との境には，わずかに突出する低い内提がめぐる。内提の上端面は内側に低い傾斜面をなす。下面の4脚のうち，1脚を欠く。脚は基部を太く先を細く作り，すべて8角形に面取りしている。前脚より後脚が5mm高いため，硯全体が前方に低く傾斜している，平城宮

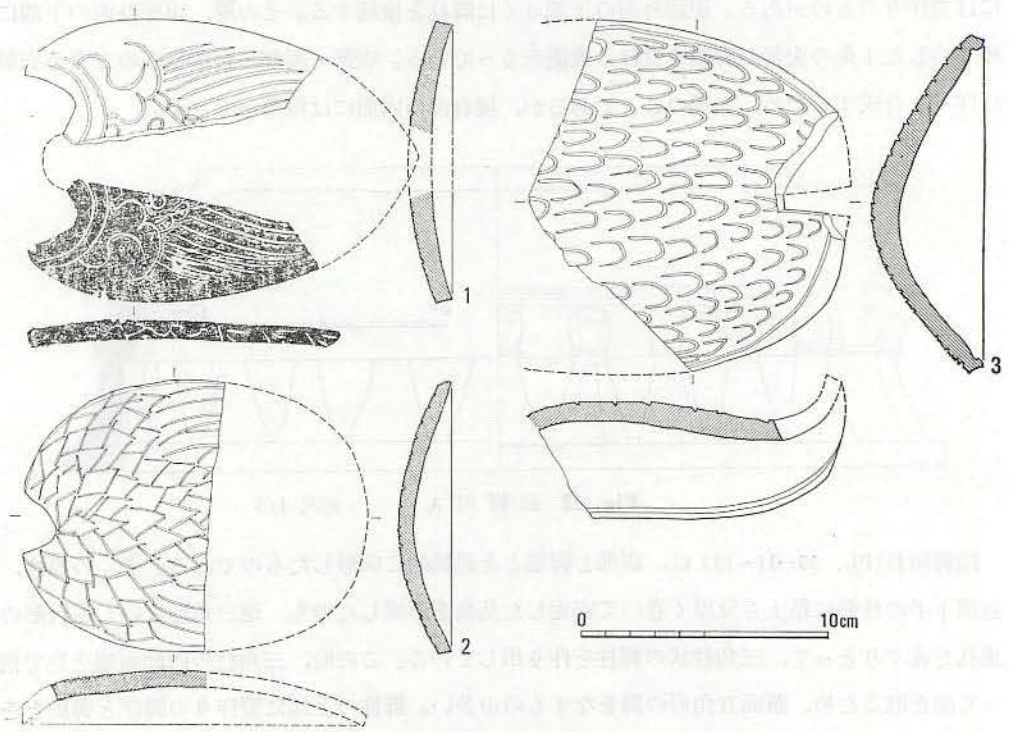

Fig. 43　鳥形硯・亀形硯の蓋　　縮尺 1/3

1 和歌山県大日山I，2 平城宮SD3410，3 平城京左京八条三坊

32）奈良県・奈良国立文化財研究所『平城京左京八条三坊発掘調査概報』1976年，p. 33。

33）和歌山県教育委員会『近畿自動車道和歌山線埋蔵文化財調査報告』（和歌山県文化財学術調査

では宝珠硯が他に2点出土している。このうちの1例（第22次南調査出土）は，本例と同笵であり，両者の比較によって，陸・海・外提内肩までが木製の笵型によったものであることがわかる。硯面長径15.4cm，硯面短径13.7cm，中心部高3.0cm。

ここで双脚円硯とよぶもの(17)は，須恵器杯B蓋と相似し，下面にへら切り痕跡をとどめ，また外周に溝を1条めぐらしていることなどから，円い平面形をもったものと想定される。上面の一端を小判形に深くくぼめて海とし，内提はない。小片のため下面に脚の痕跡はないが，陸を水平ないし前面に向って低く傾斜させるためには，最低2本の脚が必要であったと考える。硯面径約16.5cm。復原高約3cm。 双脚円硯

今回の調査では，須恵器の杯B蓋の内面を硯として用いた，杯蓋硯が多数出土した(PL. 58—10, PL. 60—57)。ここではその1例（18)を，後に報告するSK820出土の墨書土器（杯A I-1，墨書土器37）と組み合わせて撮影した（COLOR PLATE 1—2, PL. 56—18)。杯蓋硯は，通常，杯B蓋と杯Bとを組み合わせて使用したと考えられているが，ここにしめす蓋と杯Aとの口径が合致し，両者の墨書が同筆と見られることから，組みで用いられたものと考えられる。 杯蓋硯

K　墨書・墨画土器（PL. 57～62）

墨書のある土器や墨で絵・記号を描いた土器が，SK820・SK870・SE715その他から79点出土した。このうちSK820からの出土数はとりわけ多く，40点をこえている。以下，SK820出土（1～42），G地区出土（43～62），D地区出土（63～71），U地区出土（72～75），M地区出土（76・77），Q地区出土（78），出土地点不明（79）の順に記述する。

1　「文選巻」・「研盤」・「□面滲□」・「□」・「□」・飛雲（または宝相華）・鳥3羽，「土盤」（PL. 57—1·1′）　SK820出土の土師器皿AI a₀の底部内面の全体を文字と絵でうめている。墨が点々ととびちっており，「研盤」がしめすとおり，硯をのせた皿であろう。「文選巻」は梁の蕭統が撰した『文選』，あるいは唐初に李善が完成したその注釈に関連するものとみられる。[34] 「□面滲□」の終りの「□」の左隣り直交方向に，「見」状の表現があり，また，後述する鮮明な鳥の下にも，「兵」に似た字がある。絵は飛雲（または宝相華文）と鳥とである。前者は「文選巻」の上方にあり，飛雲とも宝相華文ともいいきれない。S状の線の右上の巻き込みに続いて大きな巴状のものを描き，左方には先のまるい花弁状のものを8つ重ね，左下に先のとがった葉形を1つ加えている。鳥は3羽おり，このうち2羽は，「文選巻」の右下に，うす墨の細線で描かれ，左向きと右向きの各1羽が向きあっている。[35] 目を点であらわし，翼の中にそえた1線から，後方に引いた数本の細線で羽をあらわすなど，表現はこまかく，かつ巧みである。しかし，周囲の汚れでクチバシや右の鳥の尾先は判然としない。鮮明な鳥1羽は雲か花の左方を左に向かって飛んでいる。前述の2羽とくらべて線も太く表現もあらい。クチバシを太い一線で，目を点であらわし，目の後方に細線3本を加えて羽としている。翼には線を3本ずつ加

「文選巻」　鳥の絵

報告書5，1972年）DY第15図。

34）SK820から出土した木簡には「文選□□一」と記すもの(PL. 39)が，第32次調査出土の木簡には，「文選五十六巻」と記すものがある(『木簡概報四』p. 16上)。SK820からは，他の文選李善注を習書した木簡(p. 56, PL. 39)がある。

35）この2羽と，上述の飛雲（または宝相華）の表現は，新羅軒平瓦の対鵬文に似ている（浜田耕作・梅原末治『新羅古瓦の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第13冊，1934年，PL. 51—637。朝鮮総督府博物館『博物館陳列品図鑑』第15輯，1941年。

えて羽を示しているが，右翼のそれは墨の汚れで消えている。尾は尖っており，これにも線を付加している。底部外面には，「土盤」の墨書がある（1′）。内面の「研盤」と同筆であろう。

鳥の絵 2　鳥，「儒」（PL. 57—2·2′）　SK820 出土の土師器皿AIa₀底部内面の中央に，両翼をあげ，脚を立ててはばたく左向きの鳥1羽を描いている。灯火器に用いた結果のくすぶりと墨痕によって細部の表現は明らかではないが，頭には羽冠をいただき，鈎形にまがるクチバシには草花をくわえている。目は杏仁形で，瞳をいれる。目の後方には5本の線をひいて羽とし，左右の翼にはそれぞれ少なくとも2～4枚の羽を描いている。右翼の上方には，飛雲ともみられる描写があり，下方には円い線がみえる。左右の脚はそれぞれ1本の縦線であらわすだけで，足先は省略している。右脚上方にも羽様の線がある。底部外面中央に「儒」の1字を書く（2′）。 *

「鳥食入器」 3「鳥食入器二口」・「鳥坏□」（PL. 58—3·3′）　SK820出土の土師器杯 CIa₀の底部内面中央に「鳥食入器二口」，口縁部外面に右から左へ「鳥坏□」を書く。鳥[36]の餌入れの器であることを記したものであろう。両者同筆である。 *

「鸚鵡鳥坏」 4　「莫採・鸚鵡鳥坏」・「鑿」・「鑿」，「坏」（PL. 58—4·4′）　SK820 出土の土師器杯 AIII b_1の底部外面に2種の墨書がある。第1は同筆で2行に書いた「採る莫[37]れ」「鸚鵡鳥坏」である。貝製の酒器で鸚鵡坏[38]とよばれるものがあるが，ここではオウム用の餌入れと解しておく[39]。 *

組合せ文字 第2は第1と別筆で逆方向から「君・我・念」，「為・道・金」の3文字をそれぞれ組み合せた戯書である。「君我を念い，我君を念う」，「道を為すは金なり，金をなすは道なり」とでも読むのか。なお，近世では前者を夫婦の離別にかかわる呪符として用いた事実[40]があり，興味深い。この土器の底部内面中央には「坏」の墨書がある（4′）。

5　「覦」（4字）・「裳」（4字）・「楊」（2字）・「真」（2字）・「□」・「□」・「□」（PL. 58—5）　SK820 出土の土師器皿AIa₀ の内面。習書の破片である。うすれて判読できないものは「真」か「裳」らしい。木扁の1字を書き損じて消している。 *

6　「楊」（3字）・「□」・「□」（PL. 58—6）　SK820出土の土師器皿 AIの底部内面。「楊」の習書が3字縦にならぶ。右上にも「楊」があり，この下には書き損じたためか「楊」を墨で消している。中央の「楊」の左方から，別の字のハネがのびてきている。5と同筆であろう。 *

「人　事」 7　「人事」（PL. 58—7）　SK820 出土の土師器椀Cの底部内面。「人」の字から上を欠損しておりさらに上に字があったか否かは不明である。

8　「□[杓カ]」（3字）・「□」（8字）（PL. 58—8）　SK820 出土の土師器杯 CIa₀ の底部内面。

36）正倉院文書正集巻3の園池司解（天平17年4月16日）に，「申請直丁并鳥新穀事」以下，孔雀鳥の餌についての記載があり（『大日本古文書』第2巻，1901年，pp. 399），禽獣は，宮内省園池司が司っている。

37）莫という名の食用の菜があり，これを採って入れる器とも解釈できる。しかし「鸚鵡鳥坏」と同筆であることからはこの解釈はできない。

38）「鸚鵡螺状如覆坏頭如鳥頭向其腹視似鸚鵡故以為名」（『南州異物志』），「晋咸康起居注曰一詔送遼東使段遼等鸚鵡杯」（『大平御覧』巻759）。なお，『御堂関白記』寛弘7年正月15日裏書に「竹臺上置鸚鵡御酒盃」の記載がある（『大日本古記録』p. 42）。

39）『続日本紀』天平4年5月庚申条に新羅からオウムがおくられたという記載がある。『日本書紀』には大化3年12月条，天武14年5月辛未条に新羅オウム献納の記事がみえ，斉明2年9月条には，百済からオウムをもち帰った記事がある。さらに『続日本後記』には，承和14年9月庚辰条に，入唐僧がオウムを献じたという記事がある。

40）藤澤一夫「古代の呪詛とその遺物」（『帝塚山考古学』第1号，1968年）。

習書の破片である。「杓」に似た3文字と直交方向に書いた8文字は，いずれも書いた後に墨で消している。内面にも墨痕が1箇所ある。

9 「桑」 SK820 出土の須恵器第Ⅰ群土器杯BⅠ蓋の内面。硯として用いたものか，中央に「　桑　」墨が広く付いており，多数の習書のうち「桑」のみがよめる。

* 10 「者」・「可」・「也」(4字)・「為」・「吉」・「周」・「研」(2字)・「亨」・「〔月カ〕□」・「結」(PL. 58—10) SK820出土の須恵器第Ⅰ群土器杯BⅢ蓋の内面。硯として用いているため，中央の径約7cmの範囲は磨滅し，墨がついている。習書であるが，「為」のみを草書で，他は楷書で書く。なお，この土器は蓋のつまみがとれた後も硯として用いており，割れ目にも墨がついている。

11 「信等」(PL. 59—11) SK820 出土の土師器鉢Bの口縁部外面に横位置で書いている。「信　等」

* 12 「莫」(PL. 59—12) SK820 出土の須恵器第Ⅱ群土器皿 BI蓋の外面に大きく書いてある。

13 「伻」・「大」・「美」(2字) (PL. 59—13) SK820出土の土師器皿AⅡb_1 の底部外面。中央に「伻」・「大」があり，その左と下方に「美」がある。灯火器として使用している。

14 「〔道カ〕□」(PL. 59—14) SK820 出土。須恵器第Ⅰ群土器の皿BI蓋の頂部内面。字の上にはさらに2～3画あるらしいが判読できない。

* 15 「菓」(PL. 59—15) SK820 出土の須恵器杯 AI-1 の底部外面中央に書いてある。「　菓　」

16 「□□」(PL. 59—16) SK820 出土の須恵器杯 AⅢの底部外面。上の文字は「大」あるいは「丈」であろうが，左半を欠く。下の文字の左半は「尸」に似たものの下に「去」・「ム」状の表現を書き加えており，右半は「阝」ないし「卩」である。内面全体に墨がついている。

17 「〔夫カ〕〔ヂカ〕□□」(PL. 59—17) SK820 出土の土師器杯 CIa_0 の底部外面。上の文字は右上を欠き，

* 「天」ともよめる。

18 「〔化カ〕□」，「陀」(2字) (PL. 59—18) SK820 出土の須恵器杯B蓋の小破片。内面には人扁に「ヒ」状の旁を書く。外面には「陀」2字と別字の上端とがある。習書である。

19 「□」(PL. 59—19) SK820 出土の須恵器杯BⅣの底部外面。「碧」に似るが下半を欠く。

20 「日□」(PL. 59—20) SK820 出土の須恵器杯Aの底部外面。下の文字は「知」に似てい

* るが下半を欠いている。

21 「戒」(PL. 59—21) SK820 出土の土師器皿AIa_0 の口縁部内面。この文字の下には縦横の「　戒　」線と，それをかこむように小判型のものを描いている。文字を消すためのものか。

22 「〔毛カ〕□」(PL. 59—22) SK820 出土の須恵器第Ⅰ群杯BI蓋の内面。中央部を硯として用いており，その周囲に文字を書いている。「毛」の下には列点5個「・・・・・」を描く。

* 23 「木□」 (PL. 59—23) SK820 出土の土師器杯AIa_0 の口縁部外面。横位置に「木」を書き，その下にも墨がつづいているが，不鮮明で判読できない。

24 記号ふうの曲線 (PL. 59—24) SK820 出土の土師器皿AⅠの口縁部内面。円・木葉形・S形を描いている。

25 「〔千カ〕□」(PL. 59—25) SK820 出土の土師器椀AIc_3 の底部外面。

* 26 「〔太カ〕□」(PL. 59—26) SK820 出土の土師器杯CIa_0 の底部外面。字の上端と中央部を欠損している。

27 「□」(PL. 59—27) SK820 出土の須恵器第Ⅰ群土器杯AⅢ-2 の底部外面。「ウ」冠の下

に，「マ」状の字を書くが判読できない。この土器は灯火器として用いている。

「　奈　」28 「奈」・「□」・「奈」(PL. 59—28)　SK820 出土の土師器皿AIの口縁部内面。習書の小破片である。「奈」3字であろうが，中の字は墨で抹消しているため判読できない。

29 「□」・「析」(PL. 59—29)　SK820 出土の土師器杯か皿の底部外面。「析」は下半を欠くが，上半は「北」に似ている。 *

30 「成」　SK820 出土の土師器杯AIa₀の口縁部外面。欠損のため前後の続きは不明である。

31 「井」　SK820 出土の土師器皿AIa₀の口縁部外面。

32 「一」　SK820 出土の須恵器杯AIVの口縁部外面に横位置で書いている。

33 「□〔大カ〕」(PL. 59—33)　SK820 出土の土師器杯か皿の口縁部外面。「天」あるいは「大」状の文字を横位置に書くが，上端を欠く。 *

34 「□」　SK820 出土の土師器杯か皿の底部外面。習書の一部のようであるが，抹消していることと小破片のため判読できない。

35 「乃」　SK820 出土の須恵器杯AI-1 の口縁部内面。底部内面を硯として用い，口縁部下半以下に墨が付着する。上半に「乃」をはじめ細い曲線を書いている。

36 「□〔坏カ〕」　SK820 出土の須恵器第Ⅲ群土器杯BIの底部外面。土扁であるが右半を欠く。 *

37 「○」(PL. 59—37)　SK820 出土の須恵器皿CIの底部外面。火だすきが「X」状に交叉した内側にうす墨で不整円を描いたものである。火だすきを意識的に利用したものか。

38 「○」　SK820 出土の須恵器第Ⅱ群土器杯AⅢの底部外面に直径2.5cm の不整円を描く。

39 「〜」　SK820 出土の須恵器杯AⅢ の底部外面。連結していないが円を描くつもりか。

40 「〜」・刻線　SK820 出土の土師器杯CIa₀ の底部外面。径約6cm の円を描いたらしい。 *
円弧に，刻線による円弧の一部が重複したものであるが，欠損のため原形はわからない。

41 「冂」　SK820 出土の須恵器杯AI-2 の底部外面中央。記号ふうのものである。

42 円状点線・放射状点線 (PL. 62—42) SK820出土の須恵器第Ⅰ群土器皿BIの底部外面。全体の約 1/3 大の破片である。墨点によって径約 16cm の円と 3 直線を描いたものであろう。直線は円の中心で交叉して，円をほぼ 6 等分するらしい。なお，この放射状点線は後述する刻 *
線文と関連する可能性もある。

蓮弁の絵 43 蓮弁か (PL. 62—43)　SK2113 出土の土師器椀AII。底部外面の全体に蓮弁 5 弁を描いたもののようであるが，欠損のため 2 弁分しか残らない。弁端には桜花状のきりこみがあり，きりこみの内側には葉形の表現がある。弁の基端側にも同種の表現を加えたらしく，文様を削り出している。この土器の内面は全体に墨が付いている。 *

44 「□」(PL. 60—44)　SK2113 出土の須恵器杯BI蓋の内面。左半は「舌」に似る。右半は「卩」か「阝」であろう。

45 墨痕　SK2113出土の土師器杯か皿の底部内面。2 カ所に離れて墨痕がある。

46 「○」(PL. 60—46)　SK2113 出土の土師器杯か皿の底部外面中央。記号か。

47 「□木」(PL. 60—47)　SK2101 出土の土師器杯CIb₁ の底部内面。あるいは「栗」か。 *

「　東　」48 「東」(PL. 60—48)　SK2101 出土の須恵器杯 AIの口縁部外面に横位置で書く。「東」のすぐ上から欠損しており，さらに上にも文字があったかもしれない。

49 「吉」（PL. 60—49）　SK2101出土の須恵器杯B蓋の内面。

50 「□」・「□」（PL. 60—50）　SK2101 出土の須恵器杯BV 蓋の外面。硯として用いたものか，内面全体に墨がつく。先のへった筆で数文字書いているが判読できない。

51 「□」　SK2101出土の須恵器杯BII-2 の底部外面。

* 52 「□」　SK2101出土の須恵器杯BIVの底部外面。

53 「□盤」（PL. 60—53）　SK2102出土の須恵器杯BII蓋の外面。　「養　盤」

54 「□」　SD2110出土の須恵器皿Cの底部外面。

55 「沙僧」（PL. 60—55）　SD2110（または SD2126）出土の須恵器杯AIIIの底部外面。

56 「□ □」（PL. 60—56）　SD2110（または SD2126）出土の須恵器杯Aの底部外面。

* 57 「升」他（PL. 60—57）　G地区R28 地点暗褐色土出土の須恵器第I群土器杯BIII蓋の内面。硯として用い，内面中央の径約7cmの範囲に墨が付く。その周囲に数文字を書いている。

58 「菊」・「九」（PL. 60—58）　G地区O28地点包含層出土の須恵器第I群土器皿BIの底部外面。離れて2文字を書くが一連のものか。

59 「歌」（PL. 60—59）　G地区N28地点灰褐色土出土の須恵器杯AIVの底部外面。

* 60 「□」（PL. 60—60）　G地区N31地点出土の須恵器杯BIの底部外面。

61 「□□」　G地区L31灰褐色土出土の須恵器杯BIIの底部外面。墨がうすく判読しにくいが，上の文字は「大」，下の文字は「膳」か。　「大 膳」か

62 「□」・「□」（PL. 60—62）　G地区L32地点暗褐色土出土の須恵器杯BIIIの底部外面。欠損のため，「□」のは旁は完。扁部がない。この字の右方に「房」らしい文字があるが，墨が

* うすくて判読できない。

63 「内裏盛所」（PL. 60—63）　SK870出土の須恵器盤Aの口縁部外面に横位置で書く，内裏盛所とは，すなわち後論するように，内膳司と関連をもつ配膳室に所属する器であることを記したものであろう。　「内裏盛所」

64 「客」（PL. 60—64）　SK870出土の土師器皿AIIc₀ の底部外面。

* 65 「万」（PL. 60—65）　SK870出土の土師器椀Cの底部外面。

66 「□」（PL. 60—66）　SK870出土の須恵器杯BIIの底部外面。

67 「廣」（PL. 60—67）　SK870出土の須恵器杯BIIの底部外面。

68 「□」　SK870出土の須恵器杯BII蓋の内面。硯として用い，習書が多数ある。

69 「⊕」（PL. 60—69）　SK870 出土の土師器皿AIIb₀ の底部外面。「○」と「＋」を組み

* 合わせた記号ふうの表現である。

70 「ᘓ」（PL. 60—70）　SK870 出土の須恵器杯BIVの底部外面。円ないし楕円を計3つ連ねた記号である。

71 「醴大郎」・「炊女取不得　若取者笞　五十」（PL. 61—71）　井戸SE715 出土の土師器杯BIc₁ の外面。口縁部下端に「醴」，ひきつづいて底部に「大郎」を書く。口縁部外面には，　「醴 大 郎」　「炊女取不得」

* これと別に底部側から口縁部側に向って，「炊女取るを得ざれ，若し取らば笞五十とする」を3行にわけて書く。

72 「官人」（PL. 61—72）　U地区P37地点含炭層出土の須恵器杯BIIIの底部外面。　「官　人」

73 「廣」（PL. 61—73）　井戸SE715出土の土師器杯AIIc₃ の底部外面。

74 「厈」(PL. 61—74)　SB805 の北列東第2柱抜取穴出土の須恵器杯 BII の底部外面。

75 「上」(PL. 61—75)　U地区M56地点土器溜出土の須恵器壺Eの底部外面。

76 「大□□」・「調□」(PL. 61—76)　M地区 SE2278 出土の須恵器杯AIVの底部外面。前3文字と後2文字を2行にわけて書く。最後の文字は門構えの下半を欠いている。

77 「□」(PL. 61—77)　SE2278 の土師器椀AIIa。の口縁部外面下半に横位置で書く。 *

「斎　食」 78 「斎食」(PL. 61—78)　Q地区F77地点出土の須恵器杯AIIの底部外面。

79 「万呂」ほか(PL. 61—79)　出土地点不明の土師器皿BI蓋の内外面に多数の文字を習書したものである。内面の「万呂」のみがかろうじて判読できる。

L　箆書・刻画土器(PL. 62)

箆書土器が5点ある。箆による記号をもつ土器3点，焼成後に文字を刻んだ土器1点，焼成後に針先で絵画を描いた土器が1点である。 *

80 「嶋ヵ」(PL. 62—80)　D地区D19地点出土の須恵器壺の体部外面下半に，器面がまだやわらかい段階で，箆書したものである。扁の右端がわずかにのこっているが，欠損のため，上の文字の旁および，下の文字の扁はわからない。

81 「田」(81)　G地区R27地点暗褐色土出土の須恵器杯BIII蓋の外面中央近くに，充分に乾燥した段階で書く。つまみとの位置関係から，下に別の文字が続く可能性もある。 *

82 「十」(82)　SK2101 出土の須恵器甕Aの口縁部内面に，器面がまだやわらかい段階で描いたものである。

「　寺　」 83 「寺」(83)　SK2102 出土の須恵器鉢Aの底部外面。焼成後に，針様のもので，「寺」を刻み，墨の円でかこんでいる。この土器は，焼成良好堅緻であって，硬い器面に字を刻むことは容易ではなく，何回も重ねて線をひいており，この勢い余った線が，それぞれの字画からはみだして延びている。 *

鳥・人物画 84 人物画(84)　SK870 出土の土師器の杯か皿の底部内面。焼成後に針先で人物と鳥を描く。人物は頭部を欠くが，上着・ズボンを着用し，沓を履く。手は三本指であらわしている。人物の左方の鳥絵は SK820 出土の墨書鳥絵と同様に羽をひろげて飛翔している構図である。人物の下方にも一部刻線がみえるが原形はわからない。 *

M　刻線文土器類(PL. 62-85・86, Tab. 9)

焼成後に施した刻線文

土師器の杯・皿・椀には，焼成後，器面に刻線文をほどこしたものが31点ある。このうち23点は SK820 出土，残る8点は SK870，SK2101 ほかの出土品である。刻線文の実例を器種別に数えると，杯Aが11例，杯C・椀A・椀Dがそれぞれ3例，皿Aと椀Cがそれぞれ2例，杯Bとその蓋とがそれぞれ1例となっており，杯Aの頻度が最も高い。刻線を描く部位では，底部の外面のみにほどこしたものが最も多く21例を占める。しかし内外両面にほどこしたもの(2例)，内面のみのもの(5例)もある。刻線文の種類には，2本の線を十文字に交叉させたもの，2線を十文字に交叉させて生じたそれぞれの区画に，短線を加えて※状をているもの，2線と1線とを「キ」字状に交叉させたもの，4線を交叉させて「米」字状を呈するもの，4線・3線を格子状に交叉させたものがある。また，大きな円弧を描いたとみられるもの(墨書土器40)もある。これらのうち，円弧を描いたとみられるものには墨で円も描いている。 *

墨点で放射線と円とを描いた実例（墨書・墨画土器42）は，この刻線文と関連するのかも知れない，なお，刻線文をもつ土器の1例は，灯火用にも用いられている。

N 灯　火　器 (Tab. 10)

油をいれ芯をさして火をともすのに用いた土器，すなわち灯火器は多数存在する。その器種別の個体数は表示のとおりであって，土師器の椀や皿AⅢを使用する場合が多く，とくに法量の小さいものに集中している。須恵器の場合も，概して，小型の杯類を使う傾向がある。

	器　種	部　位	刻文	遺　構
1	杯A Ⅰ a_0	底部内面		
2	杯A Ⅰ a_0	底部外面		
3	杯A Ⅱ b_1	〃		
4	杯A Ⅱ b_0	〃		
5	杯A Ⅱ b_1	底部内面		
6	杯A Ⅱ b_1	底部外面		
7	杯A Ⅲ a_1	〃		
8	杯A Ⅲ a_1	〃		
9	杯A Ⅲ b_0	〃		
10	杯C Ⅰ a_0	〃		
11	杯C Ⅰ a_0	〃		
12	杯C Ⅰ a_0	〃		
13	皿A Ⅰ c_0	口縁部内面		SK820
14	杯Aか皿A	底部内面		
15	杯Aか皿A	底部外面		
16	杯Aか皿A	〃		
17	椀A Ⅱ c_3	〃		
18	椀C	底部内面		
19	椀C	口縁部内面		
20	椀D	底部内面		
		底部外面		
21	椀D	底部外面		
22	椀D	〃		
23	皿B	〃		
24	杯B Ⅲ	底部内面		SK2101
25	杯B Ⅱ蓋	頂部内面		
26	杯A Ⅰ b_0	底部内面		
27	椀A Ⅰ c_3	底部外面		SK2113
28	椀A Ⅰ c_3	〃		
29	皿A Ⅰ b_0	底部外面		
30	杯か皿	底部内面		SK870
		底部外面		
31	杯A Ⅰ c_0	底部外面		SE715

Tab. 9 刻線文土器一覧

41）碓の出土地点一覧（p. 101参照）

1は6AAB区U地区K49地点，2は6ABB区C地区I 89地点，3は6AAO区G地区H27地点4は6AAB区U地区N 49地点，5は6AAB区U地区P 49地点，6は6AAO区M地区P52地点，7は6AAO区C地区M18地点，10は6AAB区U地区P38地点でおのおの出土した。

遺　構	土　器	器　種	個体数	%
SK820	土師器	杯A Ⅱ	3	6.8
		杯A Ⅲ	4	9.1
		杯C Ⅰ	8	18.2
		皿A Ⅰ	1	2.3
		皿A Ⅱ	1	2.3
		皿C	1	2.3
		椀C	4	9.1
	須恵器	杯A Ⅰ	1	2.3
		杯A Ⅱ	2	4.5
		杯A Ⅲ	11	24.9
		杯A Ⅳ	4	9.1
		杯B Ⅰ	1	1.3
		杯B Ⅳ	1	2.3
		杯C	2	4.5
		合　計	44	100.0
SK2101	土師器	杯A Ⅰ	1	10.0
		杯A Ⅱ	1	10.0
		杯C Ⅰ	1	10.0
		皿A Ⅱ	1	10.0
		椀A Ⅱ	1	10.0
		不　明	1	10.0
	須恵器	杯A Ⅲ	1	10.0
		杯A	3	30.0
		合　計	10	100.0
SK2113	土師器	杯A Ⅰ	1	2.2
		皿A Ⅰ	2	4.4
		皿A Ⅱ	10	22.2
		椀A Ⅰ	27	60.0
		椀C	5	11.1
		合　計	45	99.9
SK870	土師器	杯A Ⅰ	1	8.3
		皿A Ⅱ	1	8.3
		椀A Ⅰ	4	33.3
	須恵器	不　明	4	33.3
		杯B Ⅱ	1	8.3
		杯C	1	8.3
		合　計	12	99.8
SE2128	土師器	杯A Ⅰ	1	100
		合　計	1	100

Tab. 10 灯火器一覧

O 埴　　輪 (Fig. 44)

市庭古墳周濠埋土から少量（整理箱2杯ていど）の埴輪が出土した。小破片が多い。

円筒埴輪　円筒埴輪の多くは明褐色軟質で，黒斑をもつものもある。全形を復原的に記述すると，高さ約50cm，厚手（厚さ1.5cm）で，口縁部が最も太く（口径32cm），しだいに細くなって底部にいたる（底径20～23cm）。タガ3条をめぐらす円筒埴輪に通有のように，タガ第1～第2条間の円形透し孔と第2～第3条間と透し孔とは，直交方向をなしている。外面のハケメは，縦（底部側から口縁部側へ）にほどこした後，横（口縁部側から俯観して右回り）方向につけている。縦ハケメはせまい（幅4.4cm）が横ハケメは広く（8cm以上），タガとタガとの間を1回の操作でほどこしており，その上・下端は，タガをめぐらす際に消されている。内面には下半に縦，上半に斜のハケメをつけ，部分的にそれをなでけしている。ほかに，焼きの悪い須恵器に似た質感をもつ青灰色硬質の円筒埴輪もある。これは縦ハケメのみであるなど調整はあらい。

朝顔形埴輪　朝顔形円筒埴輪は，小片ながら技法の点では，ふつうの円筒埴輪と一致する。

形象埴輪　形象埴輪には獣脚（Fig. 44-2），円柱形の1端面をととのえた不明品（1），蓋・家と推定される細片がある。

市庭古墳に南接する神明野古墳の埴輪[1]は，より大型（口径約40cm）で器壁薄く（1cm），青灰色硬質の実例もまた調整があらくないなど，やや異質の特徴をそなえている。比較資料としてより適当なのは，ウワナベ古墳陪冢の平塚1・2号墳の埴輪[2]であって，両者は同じ技法の系列の中でとらえることができる。そして技法からみて，3古墳の埴輪の相対年代は，市庭古墳，平塚1号墳・同2号墳の順になるものと想定できる。

神明野・平塚との比較

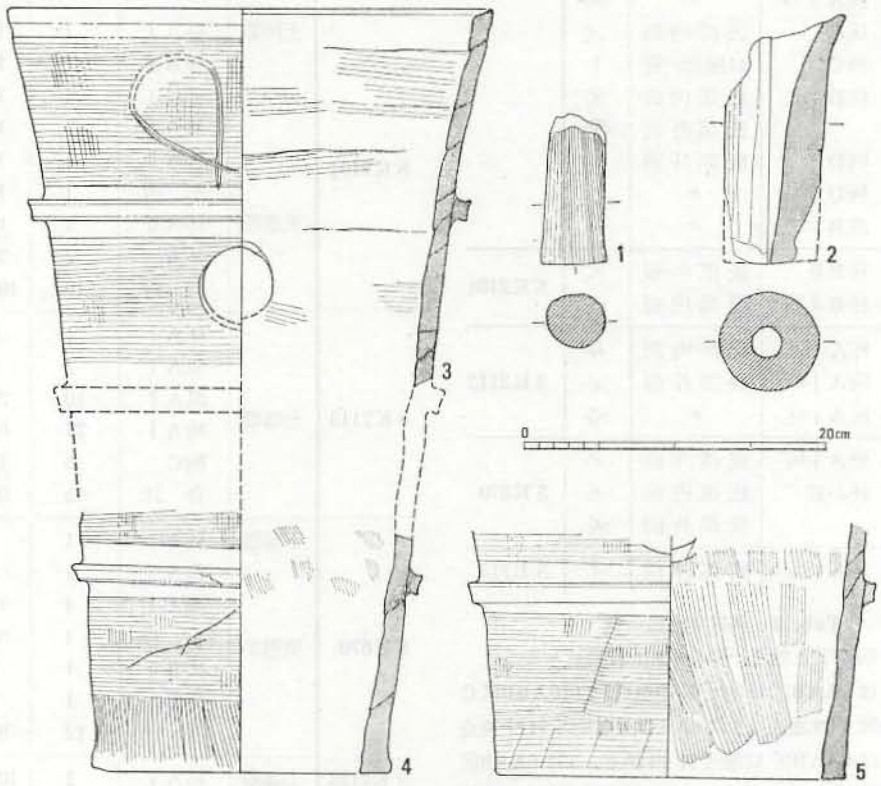

Fig. 44　市庭古墳の埴輪　縮尺 1/5

1）『平城宮報告Ⅲ』p. 29，『年報1972』pp. 26。　2）『平城宮報告Ⅵ』pp. 118, pp. 122, PL. 107～109。